JIC インフォメーション

第 240 号　2026 年 10 月 10 日
年 4 回　1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義
https://www.jic-web.co.jp

東京オフィス:〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪･ロシア留学デスク:〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階　TEL:06-6944-2341

ロシア・旧ソ連 国際交流誌













写真は、本紙記事より抜粋

モンゴル視察報告「民主化の志を未来の若者へ」
……杉浦 信也……2 P
大阪日ロ協会が視察団、9 月ペテルブルク訪問 ……4 P
ヒッポファミリークラブのキルギス・ホームステイ交流･･･7 P
≪インタビュー≫ 留学した 2 人の学生に聞く
エストニア・タリン大学でのロシア語留学……9 P
バルト三国手仕事の旅づくり……小林 奈美……14 P
≪連載≫「徳山あすかのロシア生活」
「日露交流、次世代のため」モスクワで日本文化フェス････16 P
≪連載≫ こんな時代にロシア語のすすめ
「マイクテスト、通訳は黒田です」……黒田 龍之助････19 P
≪講演録≫ 日ロ協会「ロシアを知るセミナー」
「日ソ･日露経済交流の歴史と今後の展望」･･･樫村 哲司･･･21 P
≪寄稿≫「ウクライナは独立国か？」……堀合 辰夫････27 P

J クラブ(JIC 友の会)会員募集中。年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

今夏、ジェーアイシー旅行センターは、モンゴル、中央アジア、バルト諸国、そしてロシアへの企画旅行手配を行いました。ウクライナ戦争開始以来、外務省海外安全情報でロシアがレベル 3（渡航中止勧告）となり観光旅行客が大幅に減っている下で、ロシア・旧ソ連地域専門旅行社としては、モンゴルやカザフスタン、キルギスタンなどへの旅行を中心に企画や手配を行って苦境を凌いできました。嬉しいことに今年は、大阪日ロ協会の勇気ある企画でペテルブルク視察旅行の手配もさせていただきました。以下、今年の夏の旅行の一端をご紹介します。

なお、ペテルブルク視察旅行の報告は大阪日ロ協会の会報から転載させていただきました。バルト三国手仕事の旅は、主宰者であるリニ軽井沢の小林奈美さんからいただいたチラシ形式の原稿をそのまま掲載しました。（編集部）

民主化の志を未来の若者へ

ゾリグ財団との対話とティグレ・モンゴル視察報告

杉浦 信也（ジェーアイシー旅行センター株式会社代表取締役）

2026 年 7 月 31 日から 8 月 5 日までの 6 日間、私たちはモンゴル視察団として首都ウランバートルおよびカラコルム（ハルホリン）を訪問しました。今回の視察には、ティグレ連合会（中小企業の経営支援団体）常務理事の東野秀典氏、同相談役の橋口哲夫氏、株式会社高山化成取締役会長の高山英寛氏をはじめとする有志の皆様とともに、ジェーアイシー旅行センターも実はティグレグループの一員であることから、私、杉浦が参加させていただきました。

ティグレおよび国際親善交流センター（JIC）の創設者である故・上田卓三会長は、1979 年に日本モンゴル親善協会大阪支部を設立し、1992 年に大相撲の大島部屋を通じて旭鷲山や旭天鵬ら 6 名のモンゴル青年を日本へ初めて受け入れるなど、両国の架け橋となる足跡を残されました。今回の視察は、その歴史的絆を確かめ合い、急速な社会変化を遂げる現在のモンゴルにおける具体的な協力・交流の道を模索するために企画されました。

著しい一極集中に直面する首都ウランバートル

現在のモンゴルは、経済成長が進む一方で、全人口 345 万人のうちの約 5 割、企業の約 6 割が首都ウランバートルに集中するという著しい一極集中に直面しています。これにより深刻な交通渋滞や大気汚染、都市と地方との経済格差が社会問題化しています。

この課題に対し、モンゴル政府は古都カラコルム（現地ではハルホリンと呼称）に 50 万人規模の新都市を建設する「ハルホリン新首都構想」を掲げ、都市機能の分散を図ろうとしています。こうした状況を踏まえつつ、今回の旅行で私たちが視察したハルホリン市の新首都構想の現状や、ウランバートルで訪問した「ゾリグ財団」との会合、また新モンゴル日馬富士学園の取り組みなどについて報告します。

民主化リーダーの遺志を継ぐ「ゾリグ財団」

8 月 4 日午後、私たちはウランバートル市内のゾリグ財団（Zorig Foundation）本部を表敬訪問しました。対応してくださったのは、同財団理事長であり元外務・環境大臣のサンジャースレン・オユン氏、エグゼクティブ・ディレクターのツォルモン氏、プロジェクト・オフィサーのブヤ氏です。



ゾリグ財団にて／左から 3 人目がオユン理事長。壁紙の文字は「私はモンゴル人の良識を信じています」と書かれている。

ゾリグ財団は、1990 年のモンゴル民主化運動の指導者であり、1998 年に暗殺されたサンジャスレン・ゾリグ氏の遺志を継ぎ、妹のオユン氏によって同年設立された NGO・公益財団法人です。次世代リーダーの育成、教育支援、環境保全、透明な社会づくりなど、多岐にわたる社会貢献活動を展開し、

これまでに3400人以上の学生に奨学金を支給してきました。ティグレとの間でも2名の奨学生を日本に受け入れた経緯があります。会合が行われたゾリグ財団本部の会議室には「私はモンゴル人の良識を信じています」というゾリグ氏の言葉と写真が掲げられており、その志を継いで若者支援に奔走するオユン理事長らの情熱に強い感銘を受けました。

日本モンゴル高校生ホームステイ交換交流の提案

会合の中でオユン理事長より、「日本とモンゴルの高校生による相互交換ホームステイプログラム」の立ち上げが提案されました。ゾリグ財団では現在、米国との間で高校生の相互派遣交流を実施しています。約6ヶ月間のオンラインによる英語での事前交流・相互理解セッションを行ったうえで、夏休み等を利用して5名程度の高校生を2週間ホームステイで相互派遣するモデルです。オユン氏は「この成功モデルを日本とも実現したい。共通言語を英語に設定すれば、語学力向上だけでなくグローバルな視野を持つ青少年の育成に直結する」と熱く語りました。

私自身、これまでジェーアイシー旅行センターで教育・交流事業に携わってきた経験から、この提案には大きな実現可能性を感じました。これまで研修や交流のお手伝いで関わりのあった高校や団体に紹介し、早期に実現できることを期待します。日本の高校生がモンゴルの家庭に滞在し大自然を体験すること、モンゴルの優秀な高校生が日本の生活や社会に触れることは、両国の未来の架け橋を育む上で極めて意義深い取り組みとなるでしょう。

このほか会合では東野常務理事より、社会貢献活動等を支援する「第 12 回上田卓三賞」の概要が案内され、ゾリグ財団側も関心を示し海外枠で応募を進めることで合意しました。

橋口相談役からは、昨年よりティグレ連合会・ゾリグ財団・JICの3者で行ったモンゴルのヤクの靴下の販売による募金活動の収益から得られた支援金が寄付されました。財団側からは、かつてゾリグ氏が戦時中の日本人捕虜の遺骨返還事業に尽力した経緯の説明があり、ゾリグ氏の功績を絵本にした書籍がティグレに贈呈されました。

ハルホリン市新首都構想とハルタル市長との連携

ウランバートル一極集中を解消するための国家プロジェクトとして進むのが「ハルホリン（カラコルム）新首都構想」です。私たちは8月4日、ハルホリン市のL・ハルタル市長をはじめ、主任建築家のバヤルバト氏ら幹部との会合を行いました。

ハルホリン市は、13世紀のモンゴル帝国の古都カラコルムに位置し、現在は人口約1万人の町ですが、モンゴル政府は2050年までにここに人口50万人規模のスマートシティを建設するマスタープランを進めています。モンゴル国の全人口は約345万人ですが、わずか20年ほどで全人口の7分の1に相当する新都市を建設する意欲的な構想です。2023年1月モンゴル大統領がこの構想のマスタープランを公募し、日本の建築家・隈研吾氏の日本チームほか6チームが入賞したことは日本でもニュースになりました。

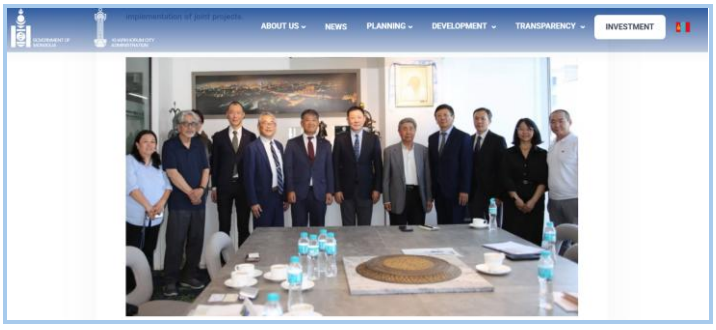
プロジェクトでは、敷地面積は18万9363ヘクタールに及び、居住区、新国際空港・物流ゾーン、観光特別ゾーン、1万8000ヘクタールの農業経済特別ゾーンなどが計画されています。



新都市構想プロジェクトについて説明するハルタル市長

ハルタル市長との会談では、同市が直面するインフラ整備や環境対策において日本の技術や知見への強い期待が示されました。ゴミ処理・リサイクル技術、発電・省エネシステム、水処理施設、農業技術（富山県との協働による「チンギスゴールド米」の節水栽培等）、自動車整備などの専門職育成機関の設立などが討議されました。橋口相談役や高山会長からは廃材リサイクル技術等の提案も出され、ハルタル市長は「ハルホリン市内にジャパンタウン（日本街）を建設したい」と意欲的に答えました。後日、市長から共同ワーキンググループの設置と連携推進を定めた正式な感謝状がティグレ連合会に届き、民間レベルでの具体的な協働の可能性が広がってきました。

ハルホリン市長室ホームページに掲載された視察団の紹介記事



https://en.kharkhorum.gov.mn/post/177586

新モンゴル日馬富士学園と体験型交流の可能性

視察のもう一つの大きな柱となったのが、8月4日午前に訪問した「新モンゴル日馬富士学園」です。同校は大相撲の元横綱・日馬富士公平氏が2018年に創立した小中高一貫の私立学校です。

国際交流担当のオーガナ氏の説明によると、同校は「心・

知・体」を鍛える「ゴールデン三角」を教育理念に掲げ、挨拶や礼儀、清掃活動など日本の教育文化を取り入れています。小 4 から英語・日本語教育を実施し、倍率 5〜17 倍の難関校でありながら、学費は一般サラリーマンの給与 3 ヶ月分程度に抑えられています。

日馬富士理事長との対話の中で注目されたのが、同校が中学 1〜4 年生を対象に実施している「労働キャンプ」です。電気のない自然環境下で薪を拾い、火を起こし、ゲルを組み立てて生活するプログラムです。日馬富士理事長から、「物やインフラに恵まれた日本の若者にとっても、この不便な環境での労働キャンプは『あることへの感謝』と成長の糧になるはず。日本の高校生との合同サマーキャンプを実現させたい」との情熱的な提案がありました。また、「子どもたちに新鮮な無添加ミルクを飲ませたい」という想いから「日馬富士MILK FARM」を立ち上げ、学校給食でのミルク提供を実現させたという話もありました。この取り組みは現在、国家事業として全国展開が進められています。



中央:新モンゴル日馬富士学園理事長・日馬富士公平氏

今回の 6 日間の視察を通じ、モンゴルの都市課題の現実を知ると同時に、それを克服しようとする国家の力強い息吹と、次世代育成に情熱を傾けるリーダーたちの姿に直接触れることができました。日本の平均年齢 49 歳に対しモンゴルは 27 歳。モンゴルはとても若者人口が多い国です。単に年齢の違いだけではないようにも思いますが、知り合った多くの人からこの国を変えていこうというエネルギーを感じました。

討議し提案された内容は、私たちだけで対応するには過分なものもありますが、かつて上田会長が繋いだモンゴルの人たちとの交流と協力の輪を一歩でも前に進めるためのアクションを続けていければと思います。

最後に本視察を支えてくださった関係者の皆様、そして現地で温かく対応してくださったモンゴルの皆様に心より感謝申し上げます。



スモールヌイ(市政府庁舎)の前で、五十嵐理事長とともに

大阪日ロ協会が視察団 9月 ペテルブルクを訪問

大阪日ロ協会は、9 月 9 日〜14 日、サンクトペテルブルクへの視察訪問を行いました。これは 9 年ぶりのロシア訪問団です。ウクライナ戦争の開始以後、外務省の海外安全情報でロシアはレベル 3（渡航中止勧告）となっており、日ロの人的交流（とくにロシア訪問旅行）はこの 5 年間ほとんどストップしています。そんな中でもロシアの市民生活の実情を視察し、将来の関係改善と対話の糸口を探ろうと、ちょうど 9 月 11 日に『第 3 回日露学術交流シンポジウム』がペテルブルク国立経済大学で開催される日程に合わせて、視察訪問団を企画しました。

視察団には、紀田馨・事務局長（大阪府議会議員）、三浦寿子・副理事長（元大阪府議会議員）、高木浩司・あいちロシア協会常務理事(愛知県議会議員)ら 9 名が参加しましたが、現地では学術交流シンポに参加する五十嵐徳子・理事長（京都外国語大学教授）ら 4 名の研究者も一部日程に合流するなど、総勢 13 名の訪問となりました。

一行は、学術交流シンポの開会冒頭を見学したほか、サンクトペテルブルク市政府対外関係委員会の表敬訪問、露日友好協会ペテルブルグ支部での交流会・日本語教室見学、松尾浩樹・在サンクトペテルブルク日本総領事との懇談、今年 2 月に開設された日本ビザセンターの見学など、充実した視察日程をこなし、同時にペテルブルク観光を楽しみました。

第 3 回日露学術交流シンポジウム（9 月 11 日）

「日本とロシア、持続可能な発展への道」と題した日露学



術交流シンポジウムには、日ロ双方の研究者、露日協会の関係者、そして訪ロ視察団など、合わせて 50 名が参加。ワシレンコ・国立経済大学副学長、ムドラク国際協力協会会長などの開会挨拶に続いて、日ロの研究者 20 名がそれぞれの研究成果を発表しました。

この学術交流シンポは、故藤本和貴夫理事長（大阪大学名誉教授）が、新型コロナとウクライナ戦争で中断していた「日ロ極東学術交流」（1984 年より開始）を再開するため 2024 年 4 月にウラジオストクとハバロフスクを訪問して協議した際に、ロシア側から「ペテルブルクでも学術交流をやろう」という呼びかけがあり、24 年秋から開始されました。昨年 4 月に藤本先生が逝去された後は、五十嵐徳子・理事長らによって引き継がれ、今回で 3 回目の開催となります。日ロ関係は厳しい状態にありますが、このような学術交流・人的交流を継続することが、将来、関係を再構築する際の大きな手がかりになると思います。

ペテルブルク市政府対外関係委員会を表敬訪問（9 月 11 日）

9 月 11 日の午後、視察団はスモールヌイのペテルブルク市政府を表敬訪問し、カルガノフ対外関係委員会副議長と会見しました（五十嵐理事長も学術交流会から合流）。

同副議長は、「複雑な情勢下にもかかわらず、大阪から大勢来てくれて大変嬉しい。今すぐに何かできるわけではないが、接触を続けることで将来一緒に協力できる課題を探したい」と挨拶し、「今後は、オンラインで定期的にミーティングをやろう」と、いくつかの提案をしました。これに対して、紀田事務局長が、大阪市長でもある横山英幸氏が日ロ関係に思いを寄せる一人の政治家としてしたためた親書を手渡し、「大阪日ロ協会としても、今後ペテルブルク市と協力できる課題を検討したい」と応じました。**（写真はカルガノフ副議長に横山市長の親書を手渡す紀田事務局長）**



露日友好協会ペテルブルク支部を訪問、日本語教室を見学

9 月 12 日の午後、視察団はペテルブルク国際協力協会と露日友好協会などが入る「友好の家」を訪問し、そこで開講されている日本語教室を見学しました。この訪問には五十嵐理事長ほか学術交流に参加した 4 名の研究者も合流し、一緒に交流会を行いました。

ツベトコワ・露日友好協会事務局長が、「これまで、『日本の春』『日本の秋』という日本文化フェスティバルが毎年行われてきたが、最近は行われていない。2004 年に大阪ペテルブルク姉妹都市 25 周年記念代表団が大阪を訪問し、子ども絵画を開催したことを懐かしく思い出す。国同士の関係は悪くても、破損した陶磁器を漆で繋いで直す『金継ぎ』のように、壊れた部分を修復しさらに価値の高い新しい関係を作っていきたいと思う」と話したのが印象的でした。



露日友好協会の日本語教室を見学

日本語教室の責任者・ダーンシナさんは、「日本語講座を始めて 18 年になる。多くの市民や子供たちが日本語を学んでいる。日本語は難しい言語なので、興味を持たせて学習が進むように、お茶、琴、着物などの文化教室も行っている」と、着物姿で楽しそうに話してくれました。露日友好協会が日本文化に親しむ多様な活動を日常的に行っているのを見て、「大阪日ロ協会も見習わなくては」という思いを強くしました。

日本ビザセンターを視察（9 月 10 日）

現在、ロシアを訪問する日本人は非常に少ない状態ですが、逆に日本を訪問するロシア人は大幅に増えています。昨年、訪日ロシア人の数は、コロナ前（2019 年）の 2 倍近い 19 万人を記録しました。その大半が観光目的です。ビザ申請者の急増に対応して、日本大使館・総領事館の事務負担を軽減するため、モスクワとペテルブルグに「日本ビザセンター」が今年 2 月に設置されたことが日本でもニュースになりました。

日本ビザセンターは、VF Services LLC という会社が運営しており、オーストリア、フランス、スイス、マルタなど 30 カ国以上のビザ申請を取り扱うビザセンターの中にありました。担当者によると、人気トップ 3 は日本、フランス、イギ

リスで、季節によって波はあるが、1 日 250 人以上が日本ビザの申請に来るそうです（モスクワのビザセンターは 1 日 1000 人以上！）。利用者にとっては顔写真の撮影、書類の書き方支援、遠隔地居住者への書類送付などの追加サービスがあり、各国領事館にとっては煩雑な受付業務が無くなり書類審査と交付手続きに専念できる事務軽減メリットがあるので、双方に喜ばれているとのことでした。

在ペテルブルク日本総領事館・松尾浩樹総領事と面談



ペテルブルク到着の翌日（9 月 10 日）、まずはロシアの現在の状況を教えてもらおうと、日本総領事館を訪れ、松尾浩樹総領事と面談し、以下のようなお話を伺いました。

＜松尾総領事の話＞

日本の新聞ではウクライナのドローンによる市郊外の石油基地や物流倉庫への攻撃でペテルブルグやモスクワが日々攻撃されているように報道されているが、実際には市内中心部への攻撃はほとんどなく、市民生活に直結するような被害は出ていない。市内の店やスーパーなどは通常通りに動いている。

ただし、戦争の影は、市民の自由な言論空間の制限（＝戦争批判はできない）となって現れており、非友好国の外交官としては、ロシアの官公庁との接触がしにくいなど、いろいろと難しい事態が生じている。

もちろん日本政府は、ロシアのウクライナ侵攻は、国際法違反で平和を脅かす行動であり、容認できないという立場から、欧米とともに対ロ制裁に加わっている。しかし、それでも文化交流や人的交流は、将来の関係改善のために、維持し続けるべきだというのが私たちの考えだ。今年 8 月には 6 年ぶりに日露青年交流事業で、学生の短期ロシア語研修を再開し、ペテルブルグの大学で 2 週間の研修を行った。レベル 3（渡航中止勧告）が出たままだが、但し書きで「(留学、ビジネス等）やむを得ない場合は、渡航を妨げない」ということにしており、その実践例として短期ロシア語研修を再開した。

大規模なものではないが、在ロシアの日本大使館・総領事館は、生け花や日本舞踊など日本文化を市民に紹介するイベントを適宜行っている。日本側からロシアと交流したい希望があれば総領事館として応援するし、ロシア側から交流の要望があれば、日本のパートナー探しなどの支援も行うつもりである。

ネフスキー大通り十字架行進（9 月 12 日）

「明日、ネフスキー大通り十字架行進という大規模なイベントがあるので、一緒に参加しないか」という提案を市政府対外関係委員会のカルガノフ副議長から突然受けました。訪問団は、12 日はピョートル大帝夏の宮殿（ペテルゴフ）を観光する予定だったのですが、「これもいい体験」と急遽 3 名がカルガノフ副議長とともに十字架行進に参加することになりました。ネフスキー大通りは、サンクトペテルブルク市の中心部を走るメインストリートです。カザン寺院の前を 11 時にスタートして、アレクサンドル・ネフスキー広場まで約 4 キロの道のりを、ロシア正教の修道僧を先頭に、イコン（宗教画）や旗や飾り台を持った人々が、沿道で大勢の人が見守る中を次々と行進しました。バス停など市内のあちこちに十字架行進の大きなポスターが飾られており、ペテルブルクの大規模な宗教的行事として定着している様子でした。



ネフスキー大通りを歩く十字架行進

サンクトペテルブルクの観光も楽しむ

訪問団は、公式行事の合間に、サンクトペテルブルクの観光も大いに楽しみました。イサク寺院、青の騎士像、血の上の教会、アレクサンドル・ネフスキー修道院、ピョートル大帝夏の宮殿、マリインスキー劇場でのバレエ鑑賞、エルミタージュ美術館などなど、ペテルブルクの主な観光地を一通り見学しました。市政府を表敬訪問した際には、歴史的建造物であるスモーリヌイの内部も見学し、1917 年のロシア革命でレーニンが革命政権の樹立を宣言した大広間や、ソ連時代から 1990 年代末まで実際に使われていた地下防空壕（核シェルター）を保存する博物館などを特別に見せてもらいました。「次回は、モスクワも見たいね」「せめて半日か 1 日、自由に街歩きできる時間が欲しかった」というのが多くの参加者の皆さんの感想でした。

今回の訪問では、ペテルブルク在住 20 年以上で、露日友好協会の事務局員であり日本語教師でもある田中美穂子さんに、現地ホテルやバス、通訳ガイドの手配をはじめ公式訪問日程のアレンジ、関係方面との連絡などで大変お世話になりました。記してお礼を申し上げます。

（大阪日ロ協会会報 NO.27 より転載。一部の写真は割愛しました）

ヒッポファミリークラブのキルギスホームステイ交流

「言葉と人間に出会う旅」



神保 泰興（JIC 東京）

一般社団法人言語交流研究所ヒッポファミリークラブは、1981 年の創立以来、全国各地で、日本にいながら英語だけでなくいくつもの言葉（多言語）を勉強し話す環境を楽しむ活動を行っています。国や文化、習慣、言葉の違いをこえて、どんな人とも心を開いて交流することを目的としています。なかでも、海外ホームステイ交流はその中心活動として、30 年以上続く大規模プログラムですが、私たちジェーアイシー旅行センターは、ヒッポファミリークラブのロシア語圏でのホームステイ交流と現地への渡航手配を、長年お手伝いしてきました。

ヒッポファミリークラブのホームステイ交流は、大学生などが行う語学研修とは異なり、「言葉と人間に出会う旅」として、文化や生活の違いを楽しんでいます。一緒に食事をしたり、こどもと遊んだり、家の手伝いをしたり、現地での生活を通して新しい家族と出会い、その一員となる体験です。帰国後もお互いに連絡を取り合い、来日交流をしたり、家族ぐるみの交流が続けられています。



2023 年からスタートしたキルギスでのホームステイ交流

2020 年のコロナ禍以降、その後の国際情勢の変化もあって、ロシアへのホームステイ交流はまだ再開されていませんが、私たちジェーアイシー旅行センターがお手伝いして、2023 年９月から、中央アジア・キルギス共和国での交流が新たにスタートしました。

旧ソ連の構成国であったキルギスは、現在でもキルギス語と共にロシア語が公用語に定められており、街中でも普通にロシア語が通用します。大半の人々が２種類以上の言語を使い分けている多言語社会です。例えば、「おはようございます」はロシア語なら Доброе утро（ドーブラエ・ウートラ）ですが、キルギス語では Кутман таң（クットマン・タン）と言い、全く違う言葉です。

毎年 8 月か 9 月に 20 名前後が「家族交流」

2023 年の初回の交流は、22 名のパイオニアメンバー（通称カザキル隊）に参加いただき、首都ビシュケクとその周辺で、5 泊 6 日のホームステイが実施されました。以来、毎年８月または９月に、20 名前後の参加者により「家族交流」の回を重ね、今年で４回目の実施となりました。

そして今年８月からは、10 代、20 代の若者を中心とする「青少年交流」も新たにスタートしました。

毎回の交流では、出発前に繰り返しミーティングを持ち、過去の参加者の経験を聞き、交流の進め方を話し合うなど、入念な準備が行われます。メンバーでおそろいのＴシャツを作ったりして、参加者同士の一体感を強め、交流への気持ちを高めています。

経由便を利用／ソウル、アルマトイで観光も楽しむ

キルギスへの直行便がなく経由便も限られるため、渡航のルートは、2023 年の交流開始以来ずっと、成田から韓国ソウル経由のアシアナ航空便で、まずはカザフスタンのアルマトイへ向かいます。ソウル・仁川空港での乗り継ぎ時には韓国グルメを楽しんだり、韓服を着たりと、待ち時間も海外交流を満喫しています。

アルマトイ到着後に１泊。年によっては、アルマトイでも日本語学習者との交流会を持つことがあります。翌日はアルマトイの半日観光。ゼンコフ教会、パンフィロフ公園、グリーンバザール、そして郊外にある標高 3200m のメデウ（シンブラク）など、アルマトイの町を短いながらも楽しみます。

その後は専用バスで４時間ほどかけて、アルマトイからキルギスの首都ビシュケクへ向かいます。陸路でのカザフ・キ

ルギス国境越えは、日本からの海外旅行のルートでは、なかなか機会がない貴重な経験となります。

ホームステイ中はキルギス家庭料理を満喫

ビシュケクに到着するとホスト家族との対面式。ホスト家族の皆様は、キルギスの踊りや音楽で迎えてくれます。日本側も日本の歌「もみじ」を歌ったりして応えます。そしていよいよホームステイが始まります。

各メンバーが１人ずつ現地の家庭に入り、日常生活を共有する中で、キルギスの習慣を体験したり、日本の文化を紹介したりします。







「家族交流」「青少年交流」の一コマ。どれもこれも初めての体験。どの顔にも笑顔があふれています。



ステイ中は外食ではなく、ほとんどアパ（お母さん）たちのおいしい手作りのキルギス家庭料理をいただきます。お肉中心ですが、野菜や果物もたっぷり。チーズやハチミツもあります。味付けは塩胡椒が中心で、辛いものはあまりないようです。特に手際よく作ってくださったマンティ（水餃子）が美味しかったとの声がありました。

ホストファミリーとともに外出も楽しむ

滞在中、ホスト家族はいろいろなところに連れて行ってくれます。ビシュケク市内の国立博物館、世界遺産のブラナの塔やアラアルチャ国立公園などなど。ビシュケク市内から遠く離れ、ソビエト時代には幻の湖といわれたイシククリ湖まで行って湖水浴や沿岸にある温泉を楽しんだという方、あるいは生まれて初めて馬に乗せてもらったという参加者もたくさんいます。ホスト家族の真心で、日本では決して出来ない体験をたくさん経験することができました。

日本帰国後も、キルギス交流の参加者の皆さんは、滞在中に耳にしたキルギス語を、お互いに毎日のように投げかけ合っています。そして、今度はキルギスから訪日する交流団のホームステイを各家庭で受け入れ、相互交流を積み重ねています。

＊　　＊　　＊

私たちジェーアイシー旅行センターも、これまで４年間にわたり、ヒッポファミリークラブのホームステイ交流のお手伝いを、無事故で行うことができました。まだまだ日本では広く知られていないキルギスの自然と文化、そして何よりそこで暮らす人々の魅力を多くの方に体験していただくことができ、心から嬉しく思います。

来年以降も、更なる交流の推進を通して、相互理解に少しでも貢献できるよう尽くして参りたい、と願っています。

（旅行手配／ヒッポファミリークラブ担当者）



エストニア・タリン大学でのロシア語留学

インタビュー　留学した２人の学生に聞く

2022 年以来、ロシア語留学の留学先は、カザフやキルギス、バルト三国など、旧ソ連諸国へとシフトしました。

2025 年 9 月から約 9 か月間、エストニアのタリン大学へ留学した二人の学生（大澤美宇さん、鬮目(くじめ)美鈴さん）に、現地の様子や留学生活について聞きました。

インタビューから、ロシアへの留学とはまた違ったロシア語留学の形が見えてきます。

聞き手は、二人の留学手続きを担当した小西章子（JIC 留学担当チーフ）です。



クラスメイトと演劇を見に行きました

【ロシア語留学先としてタリンを選んだ理由】

小西　今回お二人は、いろんな留学先がある中からエストニア・タリンを選ばれましたね。JICの長期留学先ラインナップに、表立ってタリンを掲載していなかったと思うのですが、なぜタリンを選ばれたのでしょうか？

大澤　私の場合は大きく分けて二つあります。一つ目は、ちょっと消去法的な理由になってしまうんですけど、今のロシア語留学先としてメジャーな中央アジアの国々のインフラ面への懸念があったことです。二つ目に、元からバルト三国に興味があったからです。JICさんに電話して相談したところ、エストニアへ長期留学で行けるプログラムあるよって紹介されたので、という流れでした。

鬮目　私はロシアに行けるなら行きたいなとは思っていましたが、世界情勢を考慮していろいろ考えました。長期留学の前に、大学の先生方がキルギスやウズベキスタンでの一か月研修や、エストニアへの二週間研修を紹介してくださり、実際タリンに行ってみたら思ったよりもIT先進国で発展的ですし、街の雰囲気がすごく好きで、関わった人たちも素敵でした。ここで長期留学して、ロシア語はもちろんエストニアの人々の生活とか、どういう価値観を持っているのかなどを知ることができたらいいなと思って選びました。

小西　実際にタリンに行ってみて、治安面ではどのように感じましたか？

鬮目　治安に関しては、ほんとに日本と同じような感じというか、夜一人で歩いても全然怖くはなかったです。旧市街の、人が多いところを真夜中に一人で歩くということは避けていましたが、普段は一人で歩いていても全然問題なかったです。それから、別の人の話ですけど、タリンの公共交通機関で財布を置き忘れた時に、中身もそのまま無事に届けてもらったっていう話も聞きましたので、犯罪やスリとかも少ないのかなと思いました。

大澤　私も基本的には同じ印象を持っていて、カフェとかレストランなどの公共の場所で私物を置いていても取られないくらいだと思います。でも、私が住んでいたロシア系の住民が少し多い地域は、夜にパトカーが止まって、浮浪者のおじさんを捕まえるところも度々見受けられました。旧市街とか中心地は基本的に治安が良いと思うんですけど、暮らすとなると多少地域差はあると思いました。

小西　事前に情報を得て対策をしていれば、特に危ない目に遭うとかそういうことはなかったということですね？

大澤　そうですね、夜道を一人で歩くということを避けるなど基本的な対策で大丈夫だと感じました。

小西　治安の良さは留学先を選ぶ上で大きなポイントになりますね。

【タリン大学でロシア語を学ぶ】

小西　では、次にタリン大学について、話を聞いていきたいと思います。タリン大学では「ロシア語集中コース」に参加されましたが、どんな授業を受けましたか？

大澤　ロシア語の授業に関して言うと、ロシア語集中コースでは90分の授業が1週間に10コマが基本でした。その時の大学の都合なのか、8コマの週があったり、12コマの週があったりはしましたが、平均して１週間に10コマです。

小西　ロシア語の授業はレベル別に進められていると思うのですが、内容的には会話とか文法とか、いくつかの科目別に授業があったのでしょうか？

鬮目　はい、週10コマあるうちメインでやっていたのは会話と文法。文法よりは会話が多かったと感じています。10コマ中５、６コマあったと思います。その他には、クラスのレベルにもよると思いますが、エストニアとロシアの歴史を交互に学んだり、学んだ内容に関連させて考える授業があったり、読解の授業も週1コマありました。ほかに課外授業みたいなものがあって、先生が博物館と美術館を中心に、消防署や地元のカフェとかにも連れて行ってくださって、ロシア語で色々説明してもらって、学芸員さんや店員さんと話をしたりする授業もありました。座って受ける授業だけではないっていうのが良いなと思いました。

小西　そうなんですね、それは初めて知りました。クラスにはいろいろな国籍の方がいらっしゃったのですか？

大澤　私たちが行った時は、イギリスとアメリカと日本みたいな。プログラム自体が英語で開講されているというのもあると思うんですが、英語圏の人が多かったです。

小西　授業は英語で進むのですか？

大澤　いえ、授業は98%くらいロシア語なのですが、分からないことがあったとき、説明がちょっと難しい時に、英語にチェンジして説明されました。

小西　なるほど。アメリカやヨーロッパ圏では、ロシア語留学したいけれどロシアには行けないという雰囲気が日本以上に強いのだと思います。そういう方々がバルト三国に集まっている可能性もありますね。では、授業以外に宿題とか、課題とかはいかがでしたか？多かったですか？

鬮目　私は予習、復習に時間をかけることが多かったです。授業中は、たくさん板書された単語をとりあえずメモするのに必死で、あとできちんと見返したりしました。文法の宿題もほぼ毎回ありました。物語の読解の授業では、ちょっと堅い文語的なロシア語が多かったので予習が必須でした。

小西　留学してすぐの時期と生活に慣れてからでは感じ方も異なるかもしれませんが、授業以外の時間にすべき宿題や課題の分量は適正だと思われましたか？多くて困るとかいうことはなかったですか？

大澤　プレゼンテーションの準備が大変な週が時々あったかなと思います。

鬮目　私はプレゼンテーションのとき、毎回準備を夜中3時くらいまでやって提出していました。提出した時間を先生にチェックされて、「あなたはちゃんと寝てるの？」って言われたりしましたね。それ以外の普段の宿題では夜更かしまではしていません。

小西　ロシア語関連の授業以外で、大学の授業を受けたりしましたか？

大澤　エストニア語の授業を、滞在中通して取っていました。A1レベルからA2レベルまで、1週間に90分×2コマ受けました。その授業は学部の人も受けるような授業だったので、時々小テストがあり、最終テストも絶対にあるみたいな感じでした。授業は英語で進められました。受講しているのは交換留学とかで来ているヨーロッパの学生が一番多かったと思います。

小西　ハードでしたよね？

大澤　かなりハードです。エストニア語自体がすごく難しくて、ロシア語は格が6つありますがエストニア語は14格あります。その文法的な部分を深く掘り下げた授業でないっていうのもありましたが、個人的には、ついていくのがかなり難しいと感じました。

小西　最後までやりきったっていうのはすごいですね。

鬮目　私はついていけなくて辞めました（笑）。

大澤　途中から「あれ？ 今日はいない？」みたいな。そんなことが多くなって「あぁ、いなくなった」って（笑）。

小西　学びたいことの優先順位は人によって様々ですからね。でも、ロシア語集中コースに参加していても、エストニア語を学ぶ機会が開かれているのは良いことですね。

【留学生活の様子】

小西　次に、タリンでの生活について伺います。

大澤　私は、秋学期はアパートに一人で住んでいて、次の春学期はホームステイで過ごしました。アパートでの生活は、プライベートな空間が保たれるという点ですごく良かったです。アパートの契約はJICさんが手伝ってくださって、契約自体はスムーズにいきました。その後、友達が先にホームステイを始めて、気になったので聞いてみたら、大学でホームステイを斡旋してくれるとのことだったので大学に問い合わせをしました。先生がホームステイ先の連絡先を送ってくださって、そこから自分でやり取りをするんですけど、一回下見に行って、その一か月後くらいに、ちょうど春学期が始まる日にステイ先に引っ越しをしました。



ホストマザーのエレーナさんと（左、大澤さん）

小西　ホームステイに関して不安はなかったですか？

大澤　もちろんありました。ホストはロシア語を話すおばあちゃんで、すべてロシア語で会話しないといけないので。でも「分からないことがあったらすぐ、ちゃんと言ってね」みたいな感じで、すごく優しかったです。夕食はホストが用意してくれて、朝食は自分で作っていました。また、ステイ先

は少し郊外にあったのでバスで通学していました。

鬮目　私は大学寮に住んでいました。幸いにも大きなトラブルなく過ごせました。寮費は、私の留学していた時は部屋タイプによってだいたい1ヶ月210～245ユーロくらいで、アパート等に比べたらだいぶ安く済んだのが良かったです。寮の中に基本的な設備はありましたし、以前住んでいた方が買って置いて帰った食器なども結構残っていたので、最初から生活できる場所は整っていたと感じます。また、ルームメイトやフラットメイトにも恵まれて、みんなに「もうちょっとゴミ箱の使い方を綺麗にしてくれないかな、私がいつもまとめて捨てることが多いから、みんなももう少しやってくれたら嬉しい」みたいな感じで話したら、ちゃんと謝ってくれて、そこから捨てるようになってくれて。ルームメイトはラトビア人の子で、普段はロシア語で会話をしていて、長期休みとか土日休みはすぐ実家に帰省していたので、結構一人の時間を確保することができたのもありがたかったですし、帰国2ヶ月前くらいにその子が引っ越したことで一人部屋になったので、結構運が良かったなと思います。他の日本人学生の中にはちょっとしたトラブルがあった方もいたようです。

小西　どうしてもありますよね。自分がうまくやろうとしても、相手があることだから全部をコントロールするのは難しいですね。

鬮目　寮でいろんな国の学生と関われるっていうのは、良くも悪くも大きな経験になるかなとは思いました。私のフラットには、私の他にラトビア人が一人と、ウクライナ人が二人でした。アフリカから来た学生もたくさんいて、毎晩お互いの部屋を行き来しているのを見ましたし、ランドリールームでもいろいろな人と話せて、本当に世界中から来てるっていう感じがしました。

小西　寮での会話はロシア語がメインですか？

鬮目　はい。ロシア語メインでした。あと寮で良かったのは、授業を受ける校舎まで歩いて5分だったことです。ぎりぎりまで寝て走っていくこともありました。寮は外からだと一見ちょっと古めだなと思いますが、8階建でリフトもあるし、中はリフォームされていて床もきれいだし、週一回掃除の方が来てくださって、希望すればベッドシーツと布団も毎週替えてもらえました。清潔感を大事にする日本人にとっても、ある程度綺麗かなと思います。

小西　エストニアの気候は予想通りでしたか？

鬮目　そうですね。夏は涼しくて冬は寒いんだろうな、雪降るだろうなっていう予想通りで、ロシアの気候に結構近いと思います。「秋は雨や曇りばかりであまり太陽が浴びられない」「ビタミンDを取るとよい」など、事前に調べていた通りでした。留学前に、3月に2週間行ったときは、まだ外は雪が残る状況で寒かったのですが、室内の暖かさにすごくびっくりしました。長袖しか持って行かなかったのでちょっと暑いくらいでした。

小西　それもロシアと結構似ていますね。ほかに驚いたことなどはありますか？

大澤　エストニアでは水道水は飲めるらしいです。でもあんまり美味しくない。ホームステイでは、おばあちゃんが濾過ボトルのような容器に入れてくれていましたが、お腹を壊すわけではないけど、味に目をつむれば飲めるぐらいのイメージだと思います。あと、ステイ先では普段からロシア料理を作ってくれましたし、ロシアの祝日や行事の時もそれにちなんだ料理を作ってくれて、ロシアの料理文化に触れたい人にはお勧めです。

小西　では次に、自由時間の過ごし方について聞かせてください。もちろん宿題もあるでしょうが、放課後や週末にしていたこととか、秋学期と春学期の間の長期休みの過ごし方とか、いかがでしょうか？

鬮目　私は、以前来た時に知り合った方から、タリンにあるよさこいチームを紹介してもらって、毎週日曜日、2時間ほどの練習に参加していました。それ以外は、もともとタリン大学のスポーツクラブで、申し込んでお金を払えば誰でも、地域のおばちゃんとかも参加するような場所でバレーボールを頻繁にしていました。



バレーボールチームにも参加していました(鬮目さん)

小西　コミュニケーションは何語で？

鬮目　そのチームはすごくグローバルな多国籍のチームだったので、メインは英語です。私は英語がそこまで得意ではないので、ロシア語話者の子に助けてもらったりしていました。

あともうひとつお勧めしたいのはカフェ巡りです。お金は少しかかってしまうんですけど、タリンにはたくさんの魅力的な個人経営のカフェがあって、どこもすごく美味しいんです。留学の後半、思ったよりお金に余裕ができそうと思い始めてから頻繁にいくようになりました。長時間座ってリモートワークする人もいたし、コンセントやWi-Fi設備もあったので、授業の後にいろんなカフェに行って、スイーツとカフェラテを頼みながら、モチベーションを上げて課題をやったりしました。お店のインテリアもすごく素敵で見るのも楽しかったです。



大澤　私は、初めの学期は学校の合唱クラブに週1回参加していました。毎回2時間くらいの練習でした。クラブはほぼエストニア語で、留学生も少なかったです。それから、タリン大学に日本語学科があるのですが、そこの学生たちが自主的にやっている日本語クラブが週1回あって、良い交流の場になっていました。これから日本に留学するという学生もいて、長期的にお付き合いできそうな友達もできました。



よさこい仲間と

　他に、現地の日本大使館でボランティアに参加し、日本文化のイベントをお手伝いしたり、そこでよさこい踊りを披露したこともありました。在留届を出した人限定でしたが、日本大使館が開催する新年会に参加することができて、エストニア在住の日本人の方やエストニア人の方、そして大使夫妻とも知り合うことができました。

小西　週末とか長期休みはどうですか？

大澤　時々エストニア国内を旅行したりしていました。私は外大生なので、友人が同時期にヨーロッパ各国に留学していたこともあり、長期休みには友達のいる国に遊びに行ったりもしました。

【タリンではロシア語ってどのくらい通じるの？】

小西　ロシア以外の国の留学先を検討する人は、ロシア語を学べること以外に、実際ロシア語を使う場がどれくらいあるのかも気にされます。大学寮でロシア語話者と出会ったり、ロシア語を話す家庭にホームステイしたりなど、ロシア語を使う場所を作る努力はできるんだけれども、自然な状態でロシア語っていうのはどれぐらい通じるのか。おふたりはどのように感じましたか？ また、ロシア語を使うのを憚られる場面はありましたか？

鬮目　私は、同時期にカザフスタンに留学していた同級生とも情報交換をしていて、カザフスタンではロシア語を使う場面は多そうでしたし、顔が似ているから道を尋ねられたりしたこともあったと聞きました。エストニアでは、それに比べると公共の場でロシア語をバンバン使うというのは難しいと思います。それでも、タリンにロシア語話者は住んでいて、そういう方たちは多分今少し窮屈な思いをしているのでは、と感じています。そういう中で、「ロシア語を話せるよ」とか「ロシア語を勉強してるんだ」って伝えるとすごく喜んでもらえたりします。友達として協力的に宿題を手伝ってくれたり、いろんな話をしてくれたりしました。本屋さんでロシア語の本を見ていた時には、「ロシア語話せるの？」と声を掛けてきてくれた子がいて。エストニアでロシア語を勉強している人を見つけて嬉しいのか、好意的に話しかけてくれる人が多いと思いました。

大澤　お店とかレストランではロシア語が使えないことが多いのですが、もちろんロシア語話者はたくさんいて、店員さんがロシア語話者のこともあります。だから、店員さんに挨拶する時に「テレ、ズドラーストヴィチェ」のようにエストニア語、ロシア語両方話して、どちらの言語に反応するかなみたいな、ちょっと試すような感じになってしまうのですが、それでロシア語を話す機会を作ったりすることもできると思いました。また、私のステイしていたのはロシア語話者がたくさん住む地域で、お店でもカフェでも全部ロシア語が基本でした。

小西　タリンの印象は旧市街などの中心部に偏りがちですが、留学するとなると、それが大学の中や生活する場所、タリン郊外にまで広がりますね。そういう見方をすると、ロシア語を使う地域はまだ残っているのが分かりますね。

【チューター制度の活用】

大澤　あと、タリン大学では、ロシア語集中コースの学生にマンツーマンでチューターが付いてくれます。チューターはタリン大学のロシア文献学部に通うロシア語話者の学生さんで、平均すると週1回、2時間～4時間くらい対面で教えてくれる機会が設けられていました。こちらのリクエストに応じてやることを決めて、それに付き合ってくれる感じです。例えば手紙の練習をやりたいといったら、そのための課題を用意してくれて一緒に練習したりしてくれます。でもチューターによってやることは結構バラバラです。

鬮目　大澤さんのチューターは一緒に長い時間散歩しながら会話をするスタイルが多かったようですが、私のチューターは授業っぽくするのが好きでした。会話の練習、手紙の練習、プレゼンの練習相手なども柔軟に対応してくれました。

小西　それはいいですね。チューターの割り当てはコースの内容・料金に含まれていたと思いますが、これはボランティアだったのでしょうか？ 相手にメリットはあったのでしょうか？

鬮目　おそらく彼らも学部の授業の一環です。チューターとしての活動レポートをまとめて提出したら単位がもらえるとか、授業選択の一つとして数えられるので、向こうにもモチベーションがあって責任を持って取り組んでいたと思います。

大澤　私たちも、組んだチューターを評価する仕組みがあって、微妙なところがあったらそれをフィードバックできるようになっていました。

小西　お互いにWin-Winなシステムのようですね。チューター制度は役に立ったと思いますか？

大澤　すごく良かったです。日常に近いロシア語を学べるという感覚がすごくありました。授業ではきちんとしたロシア語が教えられる一方で、チューターとの会話ではスラングっぽい言い方とか、そういう日常的に使われる言葉を教えてくれるというのが良かったです。

【エストニアでのロシア語留学、お勧めポイント】

小西　最後に、ロシア語留学を検討している人にエストニアを選択肢に入れてもらうために、お勧めポイントがあれば聞きたいと思います。

鬮目　治安がよいこと、自然に触れる機会が多いこと、それからこれは感覚的な話になりますが、日本よりも時間の流れがゆっくりなことですかね。日本では、授業終わりにバイト



タリンの「KIOSK NO3」というカフェ

行って、その後課題して、っていう忙しない日々を過ごしていましたが、エストニアにいると、夕方の時間をすごくゆったり過ごせたと感じています。海辺を散歩したり、カフェに行ったり。自分のためにもっと時間を使おうと思えるようにもなりました。あとは、私たちが留学した時はミュージアムカードというのがもらえて、エストニアにある美術館・博物館はほぼ全部無料で入ることができました。歴史に興味があるとか、あとエストニアは抽象的な現代アートも豊富なので、そういうのをたくさん鑑賞したい人にはお勧めです。

大澤　私のお勧めポイントは二つあって、一つ目は、街並みが素晴らしくきれいなところです。私は旧市街がすごく好きなんですけど、散歩に適したスポットが沢山あるので、散歩しながらゆったりした時間を過ごせるっていうのがすごく良い点だと思います。二つ目は、私個人の感覚ですが、人と人とのつながりが日本と比べて強いと思えた点です。例えば、チューターと仲良くなったら、次はチューターが別の所でやっているボランティアに誘われて、そこでまたほかのロシア語話者と繋がりが生まれる。ホームステイ先のおばあちゃんがパーティーをやると言って友人のロシア語話者を招待して、その人たちと繋がったり。芋蔓式という**現地で有名なセムラというお菓子**と言葉が正しいか分かりませんが、人と繋がり、人と交流できる場面がすごく多い印象を受けました。



小西　留学を通じてロシア語の上達は感じましたか？

鬮目　最初はみんなの前で喋るとか苦手だったけど、授業で徐々に慣れていって、私はこんな感じっていうのをめっちゃ喋れるようになったし、プレゼンテーションも落ち着いてできるように変わったと思います。

小西　語学そのものの上達とともに、人前で落ち着いてロシア語を話すとか、そういうところも鍛えられた。留学の醍醐味ですね。日本では鍛えにくいところかもしれません。

大澤　私は留学に行くまで、ロシア語専攻なのに全然ロシア語ができなくて。モチベーションが低かったと思います。エストニアに思い切って留学してから、鬮目さんをはじめロシア語に真剣に向き合っている人が周りにたくさんいて、それに刺激されて自分ももっと話せるようになりたいなって思い始めました。一番上達したのが会話。留学でスピーキングが一番上達して、そこにすごく達成感を感じました。ロシア語話者の方と普通に障害なく話せるようになったことが、自分的には一番嬉しかったですね。

小西　努力あっての達成感ですね。留学するだけで伸びるわけではないから。お二人が積極的な姿勢でいろんな人と繋がろう、話してみよう、行動してみようと頑張った結果だと思います。人にもよると思いますが、ロシア語を話す機会は沢山あるし、また話す機会を作ることができると分かったので、エストニアでのロシア語留学も興味がある方には是非お勧めしたいと思います。ありがとうございました。

バルト三国手仕事の旅づくり

LINI（リニ）軽井沢
小林奈美

Profile:　1991年9月独立回復直後のラトビアへ米国人でラトビアアメリカ協会の教授の立ち上げた研修プログラムに参加。その後、ラトビアBaldone町アートスクールで特別講師として2年程活動。2017年北欧バルト三国の素材と手仕事教室LINI Atelier shopを軽井沢にオープン、ジェーアイシー旅行センター様とは2018年よりバルト三国を巡る手仕事とハーブの旅の企画実施をご協力頂いております。

ラトビア研修時代　1991年11月18日ラトビア共和国の建国・独立宣言記念日へ繰り出す市民たち（写真下はリーガ自由記念碑）





ラトビアの首都リーガから約35kmの南東にあるかつて硫黄泉が湧き出た町Baldone Art Schoolでお世話になった画家で講師のイエヴァ先生と子どもたち（写真右は2014年授業の様子）





本年2026年6月催行の「バルト三国ハーブの旅」にご参加の親子グループとBaldone Art Schoolと初めてのアートプログラムを開催。校長ご夫妻指導でグラフィック＆陶芸ワークショップに参加したり森のアートギャラリーを見学。心に刻む体験ができたと喜ばれました。（写真左上）

バルト三国手仕事の旅を始めたきっかけ

ラトビアから帰国後、結婚や子育てをしていく中でまたいつかラトビアへ行く日があるかしら、と思いを馳せていた日々。東京から軽井沢へ移住、バルト三国からリネン（麻）生地を輸入して素材や製品をネットを中心に販売していました。

いつしかバルト三国から輸入された柳のかごや作家さん手作りの編み小物に興味を持つお客様からあなたの仕入れ旅にご一緒したいというお声を頂くようになり、ついに2015年6月のラトビア森の民芸品市を巡る手仕事の旅をスタート致しました。以降、口コミやご紹介で毎年人気のツアーとして多くの手仕事ファンをバルト三国にお連れして手仕事マスターを訪ね、ワークショップを体験。また、自然豊かでハーブを身近な薬草として健康の維持に取り入れている暮らし文化を専門家と共にハーバルプログラムを企画。伝統の暮らしを体験、黒パン作りや本場のサウナ文化を知るハーブツアーを６月の夏至前に催行。

2026年ツアーレポート／手仕事の旅

6月

エストニアのタリンから出発、UNESCO無形文化遺産登録の生きたミュージアムと言われるキフヌ島へ。今に繋ぐ伝統の手仕事を体験し、ラトビアでは白樺細工工房でかご編みのワークショップを。旅の最後は毎年６月初めの週末に開催の「ラトビア森の民芸品市」へ。手工芸やフード、民族衣装を纏ったグループの舞踊や合唱などラトビア文化が体験できるクラフトフェアが日本でも人気に。希望者はラトビア民族衣装センターでミトンが有名なセナークレーツで編み物ワークショップに参加、現地7泊の旅になりました。

９月

リトアニアのヴィリニュスから出発、リネン（麻）を使った植物染めを専門にしているスタジオでのワークショップで染色やニット手編み、フェルトワークを楽しみ田舎へ。羊工房で羊毛体験や柳でかごを編み森へきのこ狩りへ、リトアニアの伝統文化を体験できるプログラムを満喫しました。その後、十字架の丘を見学、ラトビアのカントリーハウスと呼ばれる体験施設では本場黒パン作りを体験後、首都リーガを目指します。この時期に開催のラトビアクラフトフェアに参加、またツアーでは初めての「占領博物館」の日本語ガイドツアーで独立回復の歴史を学びました。

2026年ツアーレポート／ハーブの旅

6月

リトアニアのヴィリニュスから出発、リネン（麻）を使った植物染めを専門にしているスタジオでのワークショップで染色やニット手編み、フェルトワークを楽しみ田舎へ。羊工房で羊毛体験や柳でかごを編み森へきのこ狩りへ、リトアニアの伝統文化を体験できるプログラムを満喫しました。その後、十字架の丘を見学、ラトビアのカントリーハウスと呼ばれる体験施設では本場黒パン作りを体験後、首都リーガを目指します。この時期に開催のラトビアクラフトフェアに参加、またツアーでは初めての「占領博物館」の日本語ガイドツアーで独立回復の歴史を学びました。

2026-2027 手仕事の旅

2026年11月4日～13日（10日間）エストニア最大の手芸の祭典マルディラートと手仕事を巡る旅
2026年12月11日～19日（9日間）フィンランド・ラップランドとエストニアの手仕事～クリスマスマーケット
2027年3月1日～9日（9日間）フィンランド・ラップランドとリトアニア最大の手芸の祭典カジューカス祭
2027年5月30日～6月8日（10日間）エストニア・セト地方伝統の手仕事とラトビア森の民芸品市を巡る旅

2027 ハーブとピルツ（サウナ）の旅

2027年6月13日～22日（10日間）ラトビアとエストニアのハーブを通して知る暮らしの知恵を現地マスターと共に学びます。～途中、ハーブ、サウナ、親子3つのグループに分かれたプログラムで充実の体験を。
2027年9月初旬（9日間予定）ラトビアのハーブとピルツを本格的に学びます。ラトビア野外博物館で開催のクラフトフェアに参加、ハーブやピルツ製品に触れます。







連絡先・旅のインフォメーションは
LINI 軽井沢　小林奈美
mail： lini.karuizawa2@gmail.com
instagram： liniteshigoto

LINI ホームページはこちら

第５回「徳山あすかのロシア生活」



「日露交流、次世代のため」モスクワで日本文化フェスティバル

モスクワの日本ファンにとって毎年恒例となっている日本文化の祭典が、HINODE 文化フェスティバルです。2019 年以後は、コロナ禍などを経て 5 年間中断していましたが、2024 年 11 月に再開しました。その後は昨年、今年と、モスクワ市内の会場で行われ、毎回会場内を移動するのも大変なほど大盛況となっています。今年は 10 月 4 日から 6 日まで 3 日間にわたって行われ、私は初日に参加してきました。平日にも関わらず大勢の人で賑わっていました。



ピーチ姫のコスプレ

HINODE の特徴は、日本の伝統的な文化芸術と、コスプレやポップカルチャー、アニメなど、様々なジャンルの日本を同時に楽しめることだと思います。毎回日本から特別ゲストが来るので、ロシア人参加者たちは日本のアーティストとの触れ合いを楽しみにしています。ちなみに昨年は、元関脇の豊ノ島さんと、元幕内力士・大喜鵬こと山口雅弘さんが来てくれており、「幕内力士の訪問は 60 年ぶり」とロシアメディアが大きく報道していました。

芸者がモスクワ地下鉄に登場

実は HINODE 開幕の数日前、着物姿で現れた 3 人組が、メディアの話題をさらっていました。その正体は舞踊集団・美尾屋（みおのや）の織位さん、みなみさん、ちあきさんです。ロシアの新聞が「芸者がモスクワのメトロに登場」と大々的に報じ、古い建築と装飾が美しいモスクワ地下鉄と、きらびやかな芸者の装いの組み合わせが、読者に強烈な印象を残しました。

初日のステージは、伝統的な舞に加えて、人気アニメ「鬼滅の刃」のテーマソングに合わせた踊りを披露したり、一般参加者と一緒に東京音頭を踊ってみるなど、大いに盛り上がりました。3 日間連続で通う人もいるので、毎日違うプログラムを組んでいます。



美尾屋のステージ

代表の織位さんは、中東にも行ったことがあり、今のロシアの状況下に対する不安はあまりなかったと話し、ロシア行きのオファーをすぐに受け入れたと言います。「ロシア文化にとても興味がありました。実際に来てみたモスクワは、思い描いていた通りでした。ロシア帝国の時代から脈々と続く文化、美しい街並み、芸術が継承されていると感じました。状況が良くなって、時が訪れたら、日本の方に旅行に来てほしいです」と織位さん。

赤の広場やグム百貨店など、少しだけ街を散歩する時間もあったそうです。みなみさんは「ロシアの方々が温かくて。こんなに親日家の方がいるのかと思って、嬉しかったです」と、日本語で何度も話しかけられたことを明かしました。ちあきさんは、ロシア行きの話が出た時、これからの人生で果



美尾屋の皆さん

たしてロシアに行く機会があるだろうか？と考え、こんなチャンスは二度とないと思い、渡航を決意。「ドローン攻撃のニュースもよく報道されているので、イベント自体がキャンセルになってしまうのではという心配はありました。でも私は行きたかった」と話し、イベントが開催できたことに対して、感謝の気持ちを述べてくれました。

筆で世界を平和に、「愛」のプレゼント

書道家でもあり墨絵師でもある HIROKA（裕香）さんは、墨書絵師として HINODE に初参加しました。日本にいるとロシアの状況が全く伝わってこず、ロシアに来た今となってはメディアの報道にも大きな違和感を覚えたそうです。実際、ロシアに来てみて、日本のことを好きでいてくれるロシア人と数多く出会い、日本の報道のイメージと現実ではこんなに温度差があるのかと、申し訳ない気持ちがわいてきた、とのことでした。



墨書絵師 HIROKA さんと、制作途中の作品

HIROKA さんのアート活動のテーマは、筆で世界を平和にすること。そのため、ロシア渡航のオファーがあった時、これは絶対に受けなければならないと思い、即決したそうです。

壇上では、最近モスクワ動物園で鶴の赤ちゃんが産まれたことにちなみ、綿の浴衣に鶴を描きました。「観客の方がこれだけ盛り上げてくれることは日本ではあまりないので、とても嬉しかったです。パフォーマンスが好きなので、機会があればこのようなことをモスクワのストリートでもやってみたいです」と話してくれました。

インタビュー時に隣にあったのは、未完の白鳥の絵。日本の鶴とペアとなるのはロシアの白鳥、ということで、更に描き込んでいき、ロシアの「露」という漢字を入れて完成させるのだそうです。

ロシア人は墨の文化に抵抗がなく、積極的にチャレンジしています。ワークショップでは、HIROKA さんの指導のもと、愛という漢字をハガキと書道用半紙に書いてみました。参加者は愛を込めて書いた作品を大切な人にプレゼントするため、大事そうに持ち帰っていました。

ロシア人のコスプレレベルが高い理由

世界コスプレサミットに、日本代表として出場したのみならず、オーガナイザーとしても関わっている FRAN さんは、コスプレーヤーが集結する HINODE のスター的存在です。



コスプレイヤーFRAN さん

このイベントに欠かせない存在となっているだけに、FRAN さんは「もはや呼ばれなくても来ているような感覚があります」とジョークを言っていました。FRAN さんによれば、コスプレの観点から言うと、ロシア人はとてもクオリティの高い衣装を作るのだそうです。それは私のような素人から見ても、明らかでした。ロシア人とはコスプレという共通の趣味を通して盛り上がれるので、言葉が通じなくても一緒に遊んだり、次のコスプレについて話し合ったりできてしまうほど心が通じている、と話してくれました。

「ロシアって美術館や博物館がたくさんあって、子どもの頃から本物を見る機会が多いですよね。目が肥えているコスプレイヤーが多いんです。今はそれこそオンラインの時代になってしまっていると思うんですけど、そうではなくて、本物を見ているからこそ作れるものがある、そのロシア人のセンスが好きなんです。例えば私は歴史衣装とか、ゴージャスで重いような衣装が好きで、ロシア人の衣装を見て『本物を見ているからこそ作れる衣装だな』と思うことがあります。日本人でも、着物の着方が違ったりすると違和感を覚えますよね。それと似た感覚で、ロシアの人って何か当たり前に持っているというか、培われているものがあるな、と。ロシア人のセンスが、私の好みのセンスなんです。」

FRAN さんは HINODE が終わったらサンクトペテルブル

クへ行き、エルミタージュ美術館で芸術鑑賞する予定とのこと。もう何度も行ってはいますが、エルミタージュの所蔵品を全て見ることはほぼ不可能です。今回も「本物」を求めながら、ロシアの友人との交流を深めたいと話してくれました。



クリスティーナさんと HINODE のマスコットキャラたち

会場を歩いていると、しょっちゅう日本語で話しかけられます。日本語勉強中の人に話しかけられるのは嬉しいものです。日本語スクールに通っているクリスティーナさんは、12 月に東京と大阪に旅行へ行くため、気合いを入れて勉強をしているとのことでした。12 月にはクリスティーナさんの誕生日があるため、2 週間の旅行を夫がプレゼントしてくれるのだそうです。「今回の目的は主にショッピングとグルメで、特に日本の生ビールが一番楽しみです。今回は無理ですが夏には沖縄に泳ぎに行きたいです」と話してくれました。

HINODE 主催者インタビュー

このイベントで特筆すべきは、完全に民間のオーガナイズだということです。会場の予約に始まり、企業のブース出展を呼びかける営業活動も、日本のアーティストへの出演依頼や安全面での説明も、全てを自分たちでこなしてきました。これまで培ったノウハウはありますが、それでも毎年何かしら新しい課題が登場してきます。日露関係の悪化を受けてスポンサー離れが起きる中、これだけのプログラムが詰まったイベントをやるのは容易ではありません。

モスクワでビジネスセンター「ジャパンハウス」等を手がける「サーヴィンスカヤ西洋」取締役の遠藤伊緒里さんは、文化交流は次世代のため、と話してくれました。

「今までもこれからも民間のレベルで文化交流を続けることが大切だと思って、やってきました。今こうして HINODE を開催しているのは、私たちのためでもありますが、何よりも、次世代のため。次世代が成長した時に、日露交流がされていて良かったなと思う人が、日本にもロシアにもいてほしい。そのために、今できることが、文化交流なのです。」

サーヴィンスカヤ西洋のルーツは、セゾングループの創業者だった堤清二氏がソ連時代に作った「モスクワ西洋」です。堤清二氏自身、辻井喬（つじい・たかし）のペンネームで



開幕で挨拶に立つ遠藤伊緒里さん（左）

詩人・小説家としても活動していました。カリスマ経営者は文化人でもあったのです。モスクワ西洋では様々な文化事業や交換留学を行なっており、それが評価されモスクワの一等地に投資する権利を得て、ビジネスセンターの開設につながったという歴史的な経緯があります。そのため、文化事業にかける情熱は会社としての信念でもあるのです。

ロシア人による催しも多数あり、挙げていけばキリがないのですが、一つだけご紹介します。高等経済学院という名門大学の歌舞伎クラブによって、狂言が上演されました。役者たちは、全員ロシア人学生ですが、全てのセリフを日本語で、完璧に暗記して演じています。舞台の上部にはロシア語の字幕がついています。



学生による本格的な狂言

この日の演目は「棒縛（ぼうしばり）」でした。酒好きで、ついつい酒を盗み飲みしてしまう召使い 2 人が、主人に腕を縛られながらも、あの手この手で酒を飲もうと知恵を絞る様子が非常にユーモラスです。酒蔵の酒を盗み飲みするシーンでは、会場が大きな笑いに包まれました。このように日本語が堪能で日本文化に夢中になっている若者たちがいるのはありがたいことで、彼らの活躍の場が少しでも増えるようにと願わずにはいられません。文化交流はまさに次世代のため、という遠藤さんの言葉を、狂言を鑑賞しながら思い出したのでした。

（徳山あすか／モスクワ在住ジャーナリスト）

第 17 回

こんな時代にロシア語のすすめ

「マイクテスト、通訳は黒田です」



通訳以外でマイクを握ることもありました。

黒田　龍之助

大学の授業でマイクを使うことがあります。もっともロシア語は受講生が 15 人前後、教室も声の届く小さな部屋なので必要ありません。ところが言語学は 100 人くらい集まりますから、講義室も大きく、どうしてもマイクを使わざるをえません。

いまではカラオケをはじめ、多くの人が日常的にマイクを使っています。でも自分の学生・院生時代を思い返せば、マイクを使うのは通訳のときくらいだった気がします。

旧ソ連からの団体旅行客を受け入れて、通訳したことが何回かありました。ナホトカから船で 300 名近くが来日して、日本の港にあちこち停泊しながら研修や観光をします。この 300 名を 7 台のバスに分乗させ、1 台ごとに 1 人の通訳がつきました。いや、正確にいえば 2 人で、日本側のロシア語通訳の他に、ソ連側の日本語通訳がいて、その 2 人が組んで仕事をするのです。わたしのような駆け出しにはベテランの日本語通訳をつけてくれるので、いろいろ勉強になることも多かったのです。

最初に組んで通訳をしたのは、ナホトカのセリョージャさんでした。日本語が上手で経験豊かな先輩で、とても頼りになりました。バスではいちばん前の左側の席に通訳 2 人が並んで座るのですが、ふっくらした彼が窮屈そうにしているので、わたしは窓側に身を寄せて、なるべく場所を空けました。車内では主にわたしがロシア語で話し、セリョージャさんがときどき補足してくれます。マイクは 1 つしかありませんので交替で使うのですが、セリョージャさんはわたしからマイクを受け取ると、それを右頬へ突き立てるように当てます。

「こうした話すほうが、息が直接に当たらないから、雑音がしないんですよ」

さすが先輩！　わたしはとても感心して、それ以来マイクを握るときはそうやっていました。もっとも今ではマイクの性能もよくなりましたから、言語学の講義中に右頬に突き立てることはありません。

団体の通訳をするときには、大人数が相手ですから、どうしてもマイクが必要です。東京タワーのエレベータ、六甲山のロープウェーなど、乗客がロシア人だけのときは通訳が交代でマイクを握ります。面白いことに、7 つのグループはそれぞれの通訳を誇りに思うらしく、共通の場面で自分の通訳が話すと喜ぶのです。

みなさま、六甲有馬ロープウェーへようこそ、通訳はおなじみ、6 号車のドラコーンチック（黒田のこと）で〜す。

こういう余計なことを挟むと、わたしのグループは他よりも盛り上がっていました。

日本語を使うこともありました。日本の旅行会社がチャーターしたソ連の旅客船では、乗船客がみんな日本人なのに、船のスタッフはロシア人。当然ながらことばに困るわけです。そういうときは、乗船している旅行グループに所属する通訳が交代で船内放送をおこないます。

お知らせいたします。第 1 シフトのお客さま、夕食の用意ができましたので、レストランまでお願いします。

船内のレストランは狭いので、乗船客全員が一度に食事をすることができません。そこで全体を 2 つのシフトに分け、時間差で食事を提供していたのでした。もっとも、船に長いこと揺られていると、だんだん気分が悪くなって食欲のない人が増えてきますので、最後のほうはシフトを分けるまでもないほどで、レストランはガランとしていました。

旅行グループは日本の港からナホトカまで船で行き、その後はそれぞれ旧ソ連各地方に分かれるのですが、2 週間後には再びナホトカに合流し、いっしょに帰国します。

同じ船に乗っていたロシア語通訳の中に、大学の先生がいました。国立大学に勤める教授でしたが、とても気さくな方で、しかもお酒が大好き。帰りの船では朝 10 時になりますと、「黒田くん、バーの開店時間です」といって、船内バーへいっしょに飲みに行きました。わたしは途中で失礼して他のことをやったりしていたのですが、先生はずーっとそこで飲みながら、バーのスタッフとロシア語で楽しそうに話しています。お酒にはかなり強い先生でしたが、数時間も飲み続ければさすがに酔ってしまいます。そういうときに船内放送の順番が先生に回ってきたりするものですから、

おひらへいらひます。らいいりひふとのおひゃくはま、ゆうひょくのよおいがれきまひたので、レスホランまれおねはいひます。

といった感じで、呂律が回りません。でもそれを咎める雰

囲気はなく、先生だいぶお飲みになりましたねと、みんなにやにやしています。心に余裕のある時代でした。

マイクを握って楽しい経験をしたことがあります。飛行機の機内アナウンスです。

そのアエロフロート機はチャーター便で、乗客は日本人しかいませんでした。小さな飛行機でしたが、わたしが率いるグループ以外にもいろいろな団体が乗っていたので、他にも日本人のロシア語通訳がいたはずです。ところがアエロフロートの客室乗務員さんは、なぜかわたしにちょっと来てほしいと頼んでくるのです。連れて行かれたのは機内放送するための狭いスペース。曰く、ロシア語のほかに日本語でも案内するのだけど、ぜひ代わりにやってほしい。渡されたわら半紙には、放送内容の日本語の原稿がキリル文字でタイプ打ちされていて、これがひどく読みにくい。アエロフロートの客室乗務員さんはまったく意味の分からない日本語を、キリル文字を頼りに発音するのでしょうか。それは負担が重すぎますよね。分かりました、喜んで代わりましょう。原稿にざっと目を通し、気持ちを落ち着かせ、いざ本番です。

「みなさま、本日はアエロフロート航空をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。当機はまもなく出発いたしますので、シートベルトを今一度お確かめください……」

そのあとは現地到着時間、機内サービスの予定など、飛行機に乗ればどこでも案内される内容。だんだん調子が出てきて、機内アナウンスっぽいつもりで、ちょっと鼻にかかった話し方にしてみたりして、ひとりでノリノリでした。

すると客室乗務員さんはさらに、救命胴衣の使い方もいっしょにやってくれというのです。小さな飛行機ではスクリーンもなく、デモンストレーションは実演しなければなりません。ハイハイ、こうなったら何でもやりますよ。日本語の説明だけでなく、客室乗務員さんがロシア語で説明するときは、自ら救命胴衣の使い方を乗客のみなさまの前で実演しました。救命胴衣を頭から被り、膨らみが足りない場合にはこうするんですよと、チューブから息を吹き込むマネをします。わたしのグループの人はびっくりしていたけど、後で笑いながらカッコよかったよといってくれました。わたしにしても、本当に得難い経験をしました。

とはいえ、別にマイクを握るのが好きなわけじゃありません。授業はむしろマイクを通さずに、自分の声で伝えたいというのが本音です。感染症が拡大していた頃は仕方なくオンラインで授業をやっていましたが、もう二度とやりたくありません。ときどきオンラインの講演会を依頼されることがあるのですが、すべてお断りしています。通訳としても、車内などではマイク越しですが、個人的な質問などは当然ながら肉声で答えていました。

そういえばこんなことがありました。わたしは他の通訳たちと打ち合わせをしていたのですが、気がつけば自分のグループが違う方に向かってぞろぞろと歩き出しているではありませんか。わたしはあわてて大声を上げました。

そっちじゃありませ〜ん！　右にまがってくださ〜い！

そして気づいたのです。自分が生まれて初めてロシア語で「怒鳴った」ことに。

生きていることばを使っていれば、大声を上げることだってあるでしょう。おかげで自分のロシア語が本物に一歩近づいた気がしました。これはマイクでは得られない経験ですよね。

＜日口交流情報＞

あいちロシア協会の総会（8 月 29 日）
京都産業大学の北上先生が講演

8 月 29 日、あいちロシア協会の第 2 回定期総会が名古屋駅前の会議室（オンライン併用）で開かれました。総会では、活動報告と活動計画、決算・予算などが承認され、その後、僧籍をもつ窪田裕也・事務局次長がクラスノヤルスク抑留者慰霊碑の写真の前で読経してシベリア抑留死没者慰霊祭が行われました。

総会後の講演会では、京都産業大学教授の北上光志先生が「ロシアと日本の文学作品の発話表現」の統計的解析結果の比較をもとに、明治以降に外国から文学というものを学んで取り入れた日本文学の、ある特徴について話をされました。

シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い
今年も 8 月 23 日に開催（千鳥ヶ淵戦没者墓苑）

今年もシベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集いが、東京・千代田区の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、8 月 23 日に行われました。存命の抑留経験者の平均年齢が百歳を超え、遺族も高齢化している中で、シベリア抑留の実態解明や遺骨収集はまだ十分に進んでいません。自民党・公明党・維新の会など各政党の代表があいさつに立ち、実態解明と歴史の継承に力を入れ、遺骨収集を押し進める決意を表明しました。

ロシア語映画発掘上映会
ほぼ月 1 回のペースで開催、現代映画の上映も

Ace Square（守屋愛代表）が続けているロシア語映画発掘上映会は、最近ますます元気です。7 月 26 日『エメラルドシティの魔法使い』、9 月 26 日『島』、10 月 11 日『スペースドッグーベルカ』と、このところ月 1 回ペースの開催で、しかも最近は現代ロシア映画作品の上映にも手を伸ばしています。

この 11 月と 12 月、来年 1 月にも上映会が予定されており、ロシア映画好きには目が離せません。

Ace Square → https://sites.google.com/view/acesquare

7 月 28 日、日本ロシア協会（西村康稔会長）の第 2 回ロシアを知るセミナーが、東京・永田町の衆議院議員会館会議室で開催されました。講師は、経団連国際経済本部の樫村哲司氏。「日ソ・日露経済交流の歴史と今後の展望」と題して、日ソ国交回復（1956 年）以来この 70 年間の日ソ・日露経済交流の歴史を大きく 7 つの期間に区分して説明されました。

『日ソ・日露経済関係は、期待と失望の繰り返しであった。ある時は「政経分離」、ある時は「政経一体」の局面を繰り返しつつ、常に政治の影響を受け続けてきた。ウクライナ戦争が続く下での今後の日露関係は、政治的対立を前提とした限定的・選択的な関与を通じて将来の可能性をゼロにしないための、冷静な「関係管理」が求められている』というまとめの言葉が大変鮮やかで、共感しました。以下はその講演内容です。（編集部）

日本ロシア協会「ロシアを知るセミナー」／７月28日

日ソ・日露経済交流の歴史と今後の展望

～近くて遠い隣国との関係をどう考えるか

樫村　哲司（経団連国際経済本部　上席主幹）

今年は 1956 年の日ソ共同宣言による国交回復から 70 周年の節目の年にあたります。本日は、この 70 年の日本とソ連・ロシアとの経済交流の歩みを振り返りながら、現在の日露関係と今後の展望についてお話ししたいと思います。なお、これから述べる内容は、この分野に携わってきた一実務者としての私見であって、所属組織の公式見解ではないということを最初に申し添えておきます。

日本とロシアは地理的には非常に近い隣国です。しかし、その関係はしばしば「近くて遠い隣国」と表現されてきました。経済面に限ってみても、その歴史は決して一直線ではありません。協力が大きく進展した時期もあれば、政治的な影響によって停滞した時期もありました。期待と失望、接近と後退を繰り返しながら今日に至っています。本日、私が伝えたいことを一言でいうならば、日ソ・日露関係の歴史とは、経済と政治を切り離そうとする試みの歴史であると同時に、その限界を確認し続けた歴史でもあったということです。経済協力は、しばしば政治問題を乗り越える手段として期待されてきました。しかし、実際には関係が深まれば深まるほど安全保障や外交といった政治的な要因が大きな影響を及ぼしてきました。

本日は、この 70 年を 7 つの局面で振り返りたいと思います。①日ソ経済協力の幕開け（1956－1970 年）、②日ソ経済協力プロジェクトの展開（1970－1979 年）、③日ソ経済交流の停滞から再開（1979－1991 年）、④ソ連崩壊後の新ロシアへの期待（1991－2000 年）、⑤プーチン政権の登場とエネルギー協力の深化（2000－2012 年）、⑥安倍・プーチン時代（2013－2021 年）、⑦ウクライナ侵略後の日露関係（2022 年～）、という形で説明し、最後に今後の展望について考察したいと思います。

日ソ経済協力の幕開け（1956－1970 年）

日ソ経済関係の本格的な出発点は、1956 年の日ソ共同宣言による国交回復に求めることができます。共同宣言によって戦争状態は終了し、外交関係が正常化されました。しかし、平和条約は締結されず、北方領土問題も未解決のまま残されました。この構図は、その後 70 年に及ぶ日ソ・日露関係の原型となりました。すなわち、政治上の根本的な問題を抱えながらも、経済・人的交流の分野では前進を模索するという構図です。

国交回復の翌 1957 年には日ソ通商条約が締結され、貿易拡大の制度的基盤が整備されました。日本経済が高度成長期に入り、エネルギーや原材料への需要を急速に高める一方で、ソ連もまたシベリア極東地域の開発を国家的課題としていたことが、両国の接近を促しました。この流れに大きな弾みをつけたのが、「赤い商人」の異名で知られるミコヤン第一副首相の来日でした（1961 年）。ミコヤンは日本の急速な経済発展と高い技術水準に強い印象を受け、帰国後には日本の発展ぶりを積極的に紹介し、経済交流の拡大を訴えたと伝えられています。さらに 1964 年に再来日した際には、経団連、日本商工会議所、日本貿易会との会合で、両国経済界の政治的な協議機関の設置を提案しました。日本側は慎重に検討を重ねた結果、有力経済人による恒常的な対話の場を設ける必要があるとの認識で一致しました。こうして 1965 年に、日本側に日ソ経済委員会、ソ連側にソ日経済委員会が併設され、両者による日ソ経済合同委員会を定期的に開催することが合意されました。この枠組みが後の日ソ経済交流を支える中核

的な制度となりました。

1960 年代に入ると、経済関係は単なる貿易拡大から、より大規模な経済協力へと発展していきました。中心となったのが、ソ連が豊富に保有するシベリア・極東の天然資源と、日本の資本・設備・技術を結びつける協力構想でした。森林資源の開発や港湾整備をはじめとする各種プロジェクトが検討され、のちの南ヤクート炭田開発やサハリン開発へとつながる基礎がこの時期に築かれました。合同委員会は、官民双方の関係者が構想を具体的な案件へと発展させるための重要な調整の場として機能しました。もっとも、この段階からすでに、日ソ経済協力は経済合理性だけでは説明できない性格を帯びていました。日本にとってソ連は有望な資源供給国である一方、安全保障の潜在的な脅威でもありました。それにもかかわらず協力が進展したのは、政治問題と経済関係を一定程度切り分け、相互利益のある分野から関係を発展させていこうという「政経分離」の考え方が共有されていたからでした。

しかし、政経分離はあくまでも現実的な対応策に過ぎず、根本問題を解決するものではありません。むしろ、協力案件が大型化し、政治的・戦略的な意味合いを強めるほど、その限界もまた明らかになっていくことになります。この点について、1966 年 3 月に東京で開催された第 1 回日ソ合同経済委員会をふり返りながら、植村甲午郎経団連副会長は次のように述べています。『わが国の経済発展のために、貿易経済協力の振興に重点を置くのは当然である。したがって、世界の一大勢力である共産圏諸国との貿易経済関係をいかに位置付けるかは日本にとって重大な関心事である。そこで生み出されたのが政経分離の政策であるが、政治と経済は本来相互に関連するものであり、政経分離の限界をどこに求めるかは極めて難しい』。

この指摘は 1970 年代の大型資源開発協力、1980 年代の対ソ制裁、さらには冷戦終結後の日露関係に至るまで、繰り返し直面する課題を見事に言い当てていました。日ソ経済協力の幕開けは、同時に日ソ・日露関係が抱える根本的なジレンマの始まりでもありました。

日ソ経済協力プロジェクトの展開（1970－1979 年）

1970 年代の日ソ経済関係は、戦後を通じて最も活発な発展を遂げた時期でした。日本はソ連の豊富な資源の導入によるエネルギー源の多角化を、ソ連は日本の資本・技術・設備の活用による資源や極東地域開発を目指しました。こうして両国の利害が一致し、資源を担保として日本が信用供与や設備輸出を行う「資源担保型」の協力の枠組みが確立されました。この協力の原型となったのが、1960 年代末に相次いで成立した第一次極東森林資源開発（いわゆる KS プロジェクト）、ウランゲル港建設プロジェクト、チップ・パルプ材開発プロジェクトでした。日本は長期信用供与によって、建設機械や設備を供給し、その返済として木材などの資源を受け取りました。この方式はその後の日ソ協力プロジェクトの基本形となりました。

1970 年代に入ると、協力の重点が木材や港湾から石炭、石油、天然ガスなどのエネルギー資源へと移りました。1973 年の田中角栄首相の訪ソを契機として、日本政府もシベリア開発協力を積極的に後押しするようになりました。経団連の日ソ経済委員会を中心とする民間主導の協力は、政府の支援を伴う国家的プロジェクトへと発展していきました。

その代表例が、1974 年に基本契約が締結された南ヤクート炭田開発プロジェクトです。日本は、長期融資と設備供給を行い、その見返りとして高品質の原料炭の供給を受けました。日本の製鉄産業にとって重要な原料炭確保策であり、日ソ経済協力を象徴する成功例となりました。同時期には、東シベリアの巨大ガス田の開発をめざすヤクーチャ天然ガスプロジェクトも推進されました。ソ連側は日本向け天然ガス輸出を構想し、探鉱段階では米国企業も参加しましたが、莫大な輸送インフラ投資や採算性の問題から商業化には至りませんでした。しかし、この構想は後の東シベリア極東エネルギー開発の先駆けとして大きな意義を有していました。さらに 1975 年にはサハリン 1 大陸棚石油開発プロジェクトが始動しました。日本企業はソ連との共同探鉱に参加し、第一次オイルショック（1973 年）後に高まったエネルギー安全保障上の要請を背景として、新たな供給源の確保を目指しました。この事業は、1990 年代以降、サハリン 1・サハリン 2 プロジェクトへと発展する重要な出発点となりました。

こうした大型案件を支えるインフラとして整備されたのが、ウランゲル港（のちのボストーチヌイ港）でした。同港はシベリア資源の対日輸出拠点として整備され、従来のナホトカ港に代わる近代的な物流基地となりました。以後、石炭、木材、鉱物資源などの輸出を支える極東最大級の港湾へと発展し、日ソ経済協力の象徴的成果の一つとなりました。

一方、この時代の日ソ経済協力の可能性と限界を最も象徴したのが、1972 年の第 5 回日ソ経済合同委員会でソ連側から提案された西シベリアのチュメニ石油開発プロジェクトでした。この構想は、日本による総額 10 億ドルを超える大規模融資と設備供給を条件に、その対価として年間 4000 万トンの西シベリア原油を 20 年以上の長期にわたり供給するというものでした。オイルショック後の日本にとって魅力的な構想であり、日ソ経済関係を飛躍的に発展させる可能性を潜めていました。しかし、交渉が進む中で、ソ連側は供給条件や輸送ルートを変更し、また供給時期も不透明となりました。日本側は政治的リスクを軽減するため米国企業の参加を求めたものの、これも実現しませんでした。さらに、当時進展していた日中関係や米ソ関係の影響、対ソ依存拡大への懸念など、経済合理性だけでは解決できない政治外交上の問題が交渉に影を落としました。最終的にプロジェクトは実現に至ら

ず、政経分離にも限界が存在することを示しました。

それでも 1970 年代の日ソ協力は、後のサハリン開発やロシア極東との経済関係の原型を築きました。同時に経済合理性だけでは大型協力プロジェクトは成立せず、安全保障、外交関係といった政治的要因が常にその成否を左右することを浮き彫りにした時代でもありました。ソ連との経済関係が本格的に政治と経済の不可分性を帯び始めたのが、まさにこの 1970 年代でした。

日ソ経済交流の停滞から再開（1979－1991 年）

1970 年代に全盛期を迎えた日ソ経済協力は、1979 年末のソ連によるアフガニスタン侵攻を契機に大きな転機を迎えます。アメリカを中心とする西側諸国はソ連への圧力を強め、日本も対ソ経済制裁に参加しました。1981 年末にはポーランドで戒厳令が発令され、東西対立は再び激化しました。いわゆる新冷戦の始まりです。こうした情勢の悪化を受け、日本側の日ソ経済委員会は開発協力や大型プロジェクトを協議する環境にはないとの立場をとり続けました。1970 年代に進められていたシベリア極東開発構想も停滞し、合同委員会の活動は事実上停止します。1979 年 9 月にモスクワで開催された第 8 回日ソ経済合同委員会を最後に、合同委員会は 5 年間も開催されることなく、日ソ経済交流は戦後最長の停滞期に入りました。

しかし、その間もソ連側は日本の経済界とのパイプを維持することを諦めてはいませんでした。ソ連経済が慢性的な停滞に直面する中、西側諸国との経済関係拡大は重要な政策課題となっていたのです。1982 年 10 月には永野重雄日ソ経済委員会代表委員に対しソ連側からモスクワ訪問を促す働きかけが行われました。ちょうどその頃、西側諸国の対ソ姿勢にも微妙な変化が生じつつあり、1982 年 11 月には米ソ貿易経済協議会総会が 4 年ぶりに開催され、約 200 名のアメリカ経済界代表がソ連を訪問しました。政治的対立を抱えながらも、経済対話のチャンネルを維持する動きが再び現れ始めたのです。

永野はこのような国際的な潮流を踏まえ、政治問題と経済協力は切り分けるべきである、少なくとも貿易問題一般については対話を続ける必要があるとの判断に至りました。そして 1983 年 2 月、自らが団長となり、約 230 名から成る大規模な貿易経済代表団を率いてソ連を訪問しました。この訪問団の特徴は、経団連や日本商工会議所などの組織が正式に派遣したものではなく、永野個人の呼びかけによって結成された点にありました。当時の政治環境を反映し、経済界として全面的な対ソ交流再開を表明することは難しかったわけです。訪問は冷え込んでいた日ソ経済関係を再び動かす重要な契機になりました。双方が対話継続の必要性を再確認した結果、1984 年 12 月に東京で第 9 回日ソ経済合同委員会が 5 年ぶりに開催されました。

この頃、サハリン石油・天然ガス開発プロジェクトは、1983 年末までに試掘や探鉱作業が終了し、開発に値する石油・天然ガスの埋蔵が確認されました。一方で、世界市場における石油・ガス価格の急落等により、経済性の評価が定まりませんでした。1986 年 4 月の第 10 回日ソ経済合同委員会では交渉の継続が確認され、1988 年 1 月の第 11 回日ソ経済合同委員会で経済合理的な開発計画の検討を積極的に推進することが合意されました。

このように対話が再開されても、政治問題が切り離されたわけではありませんでした。むしろこの頃から、日本側は経済関係と北方領土問題との結びつきを以前にも増して強く意識するようになります。第 9 回経済合同委員会では安倍晋太郎外務大臣が、異例にも北方領土問題に言及し、また安西浩日ソ経済委員長も日ソ経済関係の安定的発展と両国民の相互信頼のために北方領土問題の解決は不可欠だと述べました。これは、1970 年代の日ソ経済協力プロジェクトの成功を経て日ソ関係が発展するにつれて、棚上げされてきた北方領土問題の解決への期待が日本側に強まってきたことを示しています。

その後、1985 年にゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任し、ペレストロイカとグラスノスチを掲げてソ連経済の再建に着手しました。西側との関係改善を重視する新指導部の登場は、日ソ経済交流にも追い風となりました。しかし、ソ連経済の停滞はすでに構造的な段階に達しており、改革は期待されていた成果を上げることはできませんでした。1980 年代後半には東欧革命が相次ぎ、1991 年末にはソ連そのものが崩壊します。

結果として、1980 年代後半の日ソ経済交流の再開は、新たな発展の始まりであると同時に、ソ連という国家との経済関係の最後の章でもありました。新冷戦による断絶と対話の再開、そしてソ連崩壊へと至るこの時期は、日ソ経済関係が国際政治の変動によりいかに左右される存在であったかということをあらためて示した時代でした。

ソ連崩壊後の新ロシアへの期待（1991－2000 年）

1991 年 12 月末のソ連崩壊は、日露関係に新たな可能性をもたらしました。冷戦を規定してきたイデオロギー対立が消滅し、ロシアは市場経済化と国際経済への統合を国家目標として掲げました。日本側にも、これまで政治的制約によって十分に発展してこなかった日露関係を、経済協力を軸に新たな段階に進めることができるのではないかという期待が広がりました。

1993 年 10 月エリツイン大統領の訪日に際して発表された東京宣言では、北方 4 島の帰属問題を解決して平和条約を締結するとの基本方針が確認され、日露関係正常化への期待が大きく高まりました。経済界も新しい時代への対応を模索しました。日ソ経済委員会は 1992 年に日本ロシア経済委員会

へと改称され、翌 1993 年 2 月、約 2 年半ぶりに第 1 回日露経済合同会議がモスクワで開催されました。

しかし、従来の日ソ経済協力を支えてきたソ連の中央官庁や対外経済機関が消滅し、交渉相手そのものが大きく変化していました。それまでの日ソ経済協力の中心だったシベリア極東資源開発プロジェクトを新しいロシアとの関係の中で、どのように継承していくのかも明確ではありませんでした。

ロシア国内の経済情勢も日本企業の慎重姿勢を強める要因となりました。エリツィン政権は 1992 年 1 月にショック療法と呼ばれる急進的な経済改革に着手し、価格の自由化や国有企業の民営化を進めました。その過程で、深刻なインフレーション、生産の急減、所得格差の拡大などが発生し、国民生活は大きな混乱に見舞われました。法制度や税制も未整備で、投資環境は極めて不透明でした。そのため日本企業のロシア進出は限定的なものに留まり、第 2 回日露経済合同会議が開催されたのは前回から 3 年後の 1996 年 3 月でした。1998 年にはロシア金融危機も発生し、ルーブル暴落と対外債務の支払停止（デフォルト）によって、ロシア経済は再び大きな打撃を受けました。日ロ経済関係は期待ほどに拡大せず、「期待先行、現実には停滞」という状況が続いたのです。

そうした中で着実に前進した数少ない大型案件がサハリン石油ガス開発でした。1992 年以降、サハリン石油開発協力株式会社（SODECO）とロシア側との間で本格的な協議が始まり、従来の融資買油方式から生産分与契約（PSA）による国際共同開発事業への転換が進められました。1995 年にはサハリン州政府と国際コンソーシアムの間で PSA が締結され、日本の SODECO、アメリカのエクソン（Exxon Mobil）、ロシア企業が共同事業者として参画する体制が確立しました。日本側は単なる融資供与者ではなく、事業リスクと資金を負担する投資主体として参加することになりました。これは冷戦後の日露経済協力を象徴する案件であり、後の日本のエネルギー安全保障の重要な柱となりました。

1990 年代の日露関係は、政治面では平和条約締結への期待が高まり、経済面では市場経済化したロシアとの新たな関係構築が模索された時代でした。しかし、ロシア経済の混乱と政治的な未成熟がその前進を妨げていました。一方で、サハリン開発に代表されるエネルギー協力は着実に根をおろし、2000 年代以降の日露経済関係発展の基盤を形成したのです。

プーチン政権登場とエネルギー協力の深化（2000－2012 年）

2000 年にウラジーミル・プーチン大統領が就任すると、ロシアはエリツィン時代の混乱から脱し、国家再建へと舵を切りました。当初のプーチン政権は西側との協調路線を志向していました。2001 年のアメリカ同時多発テロには、対テロ戦争でアメリカを支持し、ロシアの WTO 加盟交渉も進められました。日本との関係でも、2000 年 9 月のプーチン大統領の訪日、2001 年 3 月イルクーツク首脳会談などを通じて、平和条約交渉の再活性化が図られました。特に、イルクーツク声明では 1956 年日ソ共同宣言を交渉の出発点とすることが確認され、領土交渉に再び前進の期待が生まれました。

この時期のロシア経済を支えたのは、石油・天然ガスなどのエネルギー価格の歴史的な上昇でした。原油価格は 2000 年代を通じて上昇し続け、ロシアは巨額の外貨収入を獲得しました。国家財政は急速に改善し、国民生活も回復しました。

こうした経済的成功はロシアに資源大国としての自信を与えるとともに、国家主導による経済運営や大国意識の復活を後押ししました。プーチン政権は、戦略産業への統制を強化し、ガスプロムやロスネフチといった国営エネルギー企業がロシア経済と外交政策の重要な手段となっていきました。この流れは、日本が深く関与してきたサハリン１・サハリン２プロジェクトにも影響を及ぼしました。サハリン１は Exxon Mobil と SODECO を中心に開発が進められ、2005 年に現地生産を開始しました。一方、サハリン２では総事業費の増大や環境問題をめぐって、ロシア政府が事業への圧力を強め、2006 年に運営体制の変更が行われました。その結果、国営ガス会社ガスプロムが経営権を取得し、外国企業が主導していた開発はロシア国家の管理下に置かれるようになりました。

もっとも、日本にとってサハリン・プロジェクトの意義はむしろ増大しました。サハリン２では 2009 年に LNG（液化天然ガス）の商業出荷が開始され、日本の電力・ガス会社向けに長期契約による供給が始まりました。ロシア極東から数日で移送できる地理的な優位性、中東依存も軽減できることから、サハリン産 LNG は日本のエネルギー安全保障上きわめて重要な位置を占めるようになりました。冷戦期に構想された日ソの資源協力は、半世紀を経てようやく本格的な成果をもたらしたのです。

しかしその一方で、この成功は日露経済協力の限界も示していました。ロシアでは市場経済化が進んだものの、資源価格の上昇に伴って国家の影響力が再び強まり、外国企業は政治的リスクと常に向き合わなければなりませんでした。サハリン２の事例は、日本企業に対して、ロシアでの事業は経済合理性だけではなく国家との関係によって左右されることをあらためて認識させました。

2008 年の世界金融危機は、資源依存型成長の脆弱性を露呈させました。原油価格は急落し、ロシア経済は大きな打撃を受けました。その後も、欧州経済の低迷や成長鈍化が続く中で、ロシア政府はアジア市場への接近と極東開発の重要性を強く意識するようになりました。日本との経済協力も、単なる資源の輸出入の関係から極東開発やインフラ整備を含むより広範な協力へと拡大する可能性が模索され始めました。

こうして 2010 年代初頭の日露関係は、平和条約問題では依然として大きな進展が見られなかったものの、経済面では協力を拡大するための土台が着実に形成されていました。そ

して 2012 年夏、安倍晋三政権が発足すると、プーチン大統領との個人的信頼関係の構築を軸に、エネルギー協力、極東開発、医療・生活環境など幅広い分野での日露協力を推進する新たな段階へと入っていきます。

安倍・プーチン時代（2013－2021 年）

2010 年代の日露関係は冷戦終結後の歴史の中で最も政治主導色の強い時代でした。2012 年末に発足した第 2 次安倍政権はロシアとの関係強化を外交上の重要課題に位置付け、北方領土問題を含む平和条約交渉の前進を目指しました。安倍晋三総理大臣とプーチン大統領は頻繁に会談を重ね、両首脳の個人的信頼関係を軸に、従来にない規模で日露協力を推進しようとしました。その背景には複数の戦略的要因がありました。

第一に、2011 年の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を受け、日本では原発の停止が相次ぎ、LNG をはじめとするエネルギー資源への依存が高まっていました。サハリンを中心とするロシア極東の資源は日本にとって有力なエネルギー供給源として改めて注目されました。

第二に、中国の急速な台頭と東シナ海をめぐる日中関係の緊張です。日本政府にはロシアとの関係改善によって北東アジアの戦略環境を安定化させ、中国への過度な依存や接近を抑制したいとの思惑がありました。

第三に、長年の懸案である日露平和条約問題を安倍政権のうちに前進させたいという強い政治的意思が存在していました。

ところが、2014 年 3 月、ロシアによるクリミア併合が発生しました。欧米諸国は対ロ制裁を発表し、日本も G7 の一員として制裁に参加しました。原油価格の下落やルーブル安の影響も重なり、日露貿易額は 2015 年には前年比で約 4 割減少しました。多くの日本企業がロシア市場の先行きに慎重な見方を強め、新規投資にも消極的になりました。

それにもかかわらず、日本政府は日露接近の方針を維持しました。2015 年 12 月に経団連は「日ロ経済関係の基本的な考え方」という提言を公表し、経済交流の維持拡大の方向性を示しました。2016 年 5 月、ソチの首脳会談では、安倍首相が「医療」「都市環境」「中小企業」「エネルギー」「生産性向上」「極東開発」「先端技術」「人的交流」から成る 8 項目の協力プランを提案しました。これらは必ずしも民間企業側から自然発生的に生まれた事業構想ではなく、日本政府が戦略的観点から対露協力の枠組みを提示し、その実現を後押しした性格が強いものでした。

2016 年 6 月には経団連もモスクワへミッションを派遣し、同年 12 月のプーチン大統領の訪日に合わせて日露ビジネス対話が開催されるなど、官民一体で関係強化が進められました。

この時期の日露関係は、従来の政経分離とは異なる様相を呈していました。政治問題が未解決でも経済関係を発展させるという従来型の発想ではなく、むしろ経済協力を通じて政治関係を改善し、最終的には平和条約問題の解決につなげようとする発想でした。言い換えれば、経済が政治を支える手段として位置づけられたのです。

けれども、こういった期待は次第に限界に直面しました。領土問題では大きな進展が見られず、ロシア側は極東開発や投資誘致には積極的でしたが、日本側が期待していた政治的妥協には応じませんでした。2018 年以降には平和条約交渉も行き詰まり、2020 年の憲法改正によってロシア国内では領土引き渡しのハードルが一段と高まりました。

2022 年 2 月ロシアによるウクライナ侵攻をもって、この時期に構想された協力の多くは事実上中断されることになります。安倍政権時の日露接近は、エネルギー安全保障、中国の台頭への対応、平和条約への期待という戦略的判断に基づく大胆な試みでした。しかし、その結末は経済協力だけで政治的対立を克服することは難しいことを改めて示すものとなったのです。

ウクライナ侵略後の日露関係（2022 年～）

2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻は、戦後の日ソ・日露関係の歴史における最大の転換点となりました。日本は G7 の一員としてロシアの武力による現状変更を国際秩序への重大な挑戦と位置づけ、欧米諸国と歩調を合わせて、金融制裁、輸出規制、資産凍結など、対ロシア制裁を段階的に拡大しました。また、ウクライナに対して、財政支援、人道支援、復興支援を継続し、戦後の日本外交としては異例ともいえる強い関与を示しました。

その結果、日露関係は政治的には戦後最悪の水準にまで低下しました。平和条約交渉は停止され、北方領土をめぐる対話も事実上途絶えました。政府間協力、人的交流の多くも縮小され、安倍政権時代に構想された 8 項目の協力プランも極東開発協力もほぼ停止状態に陥りました。2010 年代の日露接近期には、経済協力を通じて政治的信頼を醸成し、最終的に平和条約問題の前進につなげようという期待が存在しましたが、ウクライナ侵攻はその前提そのものを崩壊させました。

ただし、日本の対ロシア制裁は、単純な断絶政策ではありません。そこにはエネルギー安全保障という現実的な制約がありました。福島第一原子力発電所事故以降、日本は LNG への依存度を高めており、ロシア極東のサハリン２プロジェクトは日本の天然ガス輸入の重要な供給源であり続けました。日本政府は、対ロ制裁に参加しながらも、三井物産や三菱商事が保有するサハリン２の権益の維持を選択し、サハリン１についても権益の保全に努めました。ロシア産 LNG は侵攻後も日本の輸入量の１割弱を占めており、その重要性は容易には失われませんでした。

この点は安倍政権期との大きな違いを示しています。2013

年から 2021 年にかけての日露関係は、政治が経済を積極的に動員する「政経一体」の色彩を帯びていました。しかし、2022 年以降は逆に、政治的対立が経済関係を大幅に制約するようになりました。それでもなお国家にとって不可欠なエネルギー分野だけは例外が維持されています。そこに見られるのは、かつての「政経分離」でも「政経一体」でもなく、政治的な対立を前提に必要最小限の経済関係を管理する、新たな関係の姿です。

こうした方針を支えているのは、日本外交の特徴ともいえる選択的関与です。日本は、G7 の結束を重視し、対ロ制裁とウクライナ支援を継続する一方、自国のエネルギー安全保障や企業資産の保護に不可欠な分野では限定的な対話を維持しています。最近は日本政府関係者がモスクワを訪問し、日本企業の資産管理や既存契約に関する実務協議を実施しました。それは関係の改善を目的としたものではなく、日本の権益を守るための最低限の接触と位置付けられています。

近年の日露関係は、アメリカの対ロ政策にも大きく左右されています。トランプ政権は、ウクライナ戦争の終結に向けてロシアとの交渉を重視する姿勢を示す一方、ロシア産エネルギーへの圧力強化も求めています。日本は同盟国としてアメリカとの協調を維持するとともに、自国のエネルギー事情を踏まえて、サハリン事業に関連する例外措置の継続を確保してきました。こうした対応は、日本の対ロ政策が日米同盟やG７協調という枠組みの中で形成されていることを示しています。

ロシアに進出した企業は難しい立場に置かれています。多くの企業が新規投資を凍結し、事業縮小を進めましたが、一方で、資産売却の困難性や接収リスクから完全な撤退には至っていません。ロシア経済への期待が大きかった 2010 年代とは対照的に、現在の関心は新たな事業機会の追求ではなく、既存資産の保全と損失の最小化に移っています。

日露関係の今後について

1956 年の日ソ国交回復から今日までの 70 年の歴史を振り返ると、一つの教訓が浮かび上がります。それは、日ソ・日露経済関係は常に政治の影響を受け続けてきたということです。日本とソ連・ロシアとの間では、しばしば政経分離が唱えられてきました。実際に、政治的対立が存在しても、経済交流は継続され、多くの成果も生み出されてきました。しかし同時に、資源開発やエネルギー協力のような戦略的重要性の高い分野になればなるほど、政治と経済を完全に切り離すことはできませんでした。1970 年代のチュメニ石油開発構想、2000 年代のサハリン・プロジェクト、そして安倍政権下の８項目の経済協力プランは、いずれもそのことを示しています。経済は政治問題を乗り越えるための重要な手段となりえますが、それだけで政治的対立を解決することはできませんでした。

2022 年のロシアによるウクライナ侵攻は、その歴史的現実を改めて私たちに突きつけました。現在の日露関係は、政治面では戦後最も厳しい局面にあります。平和条約交渉は停止し、政府間対話も大幅に縮小され、かつて関係拡大を主導した経済協力の多くも停止状態にあります。しかし、他方で、関係が完全に消滅したわけではありません。サハリン事業に代表されるエネルギー分野では一定の関係が維持されており、企業資産の管理や実務的な課題への対応も続いています。

私は、現在の日露関係は、断絶というよりも、「管理される関係」と捉えるべきだと考えています。そこでは、対ロ制裁やウクライナ支援という原則を維持しながらも、エネルギー安全保障や国益に関わる最小限の接点を維持するという現実的な対応が求められています。かつての政経分離でもなければ、安倍政権時のような政経一体でもありません。政治的対立を前提とした、限定的・選択的な関与の段階にあると言えるでしょう。

では、この状況はいつ変わるのでしょうか？ 歴史を振り返ると、日露関係を大きく動かしてきた最大の要因は、実は二国関係そのものではありませんでした。デタント(緊張緩和)、冷戦終結、ゴルバチョフ改革、新冷戦など、日ソ・日露関係の大きな転換は常に米露関係の変化と軌を一にしてきました。その意味で、今後の日露関係を左右する最も重要な変数は、ウクライナ情勢とそれをめぐる米露関係の動向であると考えられます。将来、米露関係や欧露関係に何らかの変化が生じれば、日本とロシアの関係も再調整の余地が生まれる可能性があります。

逆に言えば、そのような政治環境の変化なしに、日露関係だけが大幅に改善するということは考えにくいと思います。だからこそ、日本に求められるのは、過度な楽観でも過度な悲観でもありません。

ロシアは今後も日本の隣国であり続けます。北東アジアの安全保障、エネルギー、海洋問題、北極海航路、漁業など、両国が向き合わざるを得ない課題は、将来も存在し続けるでしょう。その時に備えて、日本は原則を守りながらも、相手を理解する努力を止めないことが重要です。情報、人材、経験、人脈といった知的資産まで失ってしまえば、将来環境が変化した時に選択肢を持てなくなってしまいます。

日露関係の歴史は、期待と失望の繰り返しであったとも言えます。しかし同時に、対話の接点が完全には失われなかった歴史でもありました。関係改善を焦る必要はありません。しかし、将来の可能性をゼロにしないための準備は続けなければならない。その冷静な関係管理こそが現在の日本に求められている最も現実的な対露政策ではないでしょうか。

（了）

ウクライナは独立国か？

― 国際法上の視点などから ―

堀合 辰夫（弁護士／NPO 法人日本･ロシア協会理事）



在日ロシア大使館。この土地･建物もウクライナの反対で「ソ連邦名義」から変更できず、宙に浮いている。

１　本稿は、決して「特別軍事作戦」と称して令和４（2022）年ウクライナに侵攻したロシアの不条理を支持するものではない。紛争は無いに越したことはなく、戦火の犠牲は、敵味方の別なく悲しむべきことである。

以下は、筆者が偶々担当した民事事件処理の過程で知り得た、公開の確定資料に基づく弁護士としての見解と感想である。

２　ソヴィエト社会主義共和国連邦、所謂ソ連邦は、平成３（1991）年 12 月４日、連邦を解体、連邦構成１５ヶ国は、夫々、独立国家として分裂することになった。

上記分裂に際し、旧ソ連邦と連邦構成１５ヶ国は『ソ連邦の対外債務・資産の権利承継条約』を締結、連邦構成各国の債務、資産の割合を以下の通り取決めた。

『第４条　当事者は、旧ソ連邦の債務・資産の総額に対して共通総合指標に基づいて定められた各主体の持分を以下の通りとすることに合意した。

	(%)
ロシア連邦社会主義共和国	６１．３４
ウクライナ	１６．３７
ベラルーシ共和国	４．１３
ウズベキスタン共和国	３．２７
カザフソヴィエト社会主義共和国	３．８６
グルジア共和国	１．６２
アゼルバイジャン共和国	１．６４
リトアニア共和国	１．４１
モルドバ共和国	１．２９
ラトビア共和国	１．１４
キルギスタン共和国	０．９５
タジキスタン共和国	０．８２
アルメニア共和国	０．８６
トルクメニスタン	０．７０
エストニア共和国	０．６２
	１００　』

割合（%）の全てを累計すると、１００．０２%となるが、兎に角分裂時の各構成国の実勢に基づく平成３（1991）年１月１日現在の評価の上での条約である。

３　上記条約に基づく各国の債務・資産の事後処理は、その直後に旧連邦構成のロシアとその他の構成１４ヶ国との間で締結される１４カ国の個別協定・条約に基づいて順調に処理される筈であった。即ち、

(1) リトアニア、ラトビア、エストニアの３共和国は、その後、ロシア連邦に対して何も要求しないことになったため協定から脱落、すべてを放棄した。この分は、即時、全てロシア連邦に帰属完結した。

(2) 平成４（1992）年３月 13 日、残る１２構成国の間で締結された補足協定によって、ロシアとウクライナが共同議長国として関与し、事後の具体的な処理に当たることを確認し、署名、夫々、批准した。

(3) 残った１２当事国は、ロシアとの間で、全てをロシアが継承する旨の１２ヶの個別協定を締結した。その後、ウクライナを除く１１ヶ国は順調に各協定を批准し、夫々、履行を終了した。

(4) ところが、ウクライナは、平成６（1994）年 12 月９日付のロシア連邦との個別協定条約、即ち、『旧ソ連邦対外債務・資産の権利承継問題処理に関するロシア共和国とウクライナ間の協定』に署名をしたのに拘わらず、本日現在、この批准手続きをしないまま放置している。この未批准の協定書第３条には『1991 年 12 月１日現在の旧ソ連邦の対外負債のウクライナの割当支払義務をウクライナはロシアに譲渡し、ロシア連邦はこれを引き受ける。』、第４条には『ウクライナの支払分の対外債務の一部の支払いのため、1991 年 12 月１日現在の旧ソ連邦の資産のウクライナの割当分を、ウクライナはロシアに譲渡し、ロシア連邦はこれを引き受ける。』とあり、ウクライナの負債も、資産の持分も全てロシア連邦が引き継いだことが記載されている（この協定書の写は、ロシア連邦外務省歴史文書部１等書記官ビルレワの署名があり、その署名の真正は同文書部ソコロワ副部長の副署によって証明されている）。

４　この様に、平成３（1991）年 12 月４日の連邦分裂条約は、旧ソ連邦構成１５共和国との間で既に効力を生じている。また、(1) によりバルト三国は適法に脱退、(3) によりウクライナを除く旧ソ連邦構成１０ヶ国とロシアの具体的な各個の実行協定も完結終了した。

しかし、ウクライナは、前記ロシアとの間の個別協定を署名したのに国会における批准をしていない。

その結果、国際法上の確立した解釈では、ロシア連邦とウクライナとの間の平成６（1994）年 12 月９日の個別的な承継、取決めの条約は、未だに効力を生じていないことになる（日本国憲法第７３条２号、３号)。ウクライナはそう主張している。

５　このことは、連邦解体を機に旧ソ連邦全部を引き継いだ筈のロシア連邦にとっては、ウクライナ問題は、未だに旧ソ連邦に於ける国内問題の一部であり、従ってまた、旧ソ連邦すべてを承継したロシア連邦としては、そのままロシア連邦の未処理の国内問題を抱え込むことになったと言うことになる。

ウクライナはソ連邦の分裂を肯認し、これに基づくロシア連邦に対する具体的な承継処理条約を署名、締結しているのに、その批准の履行をしないために、条約が未発効であると主張している訳である。

しかし、このようなウクライナの対応は、ロシア連邦に対して「ウクライナ問題はロシアの国内問題である」とする国際法上の口実を与えた様な結果になっているのではないか。

残念ながらウクライナ指導部の資質を問いたいところである。

６　日本政府宮澤喜一内閣は、ソ連邦解体の一連の推移を踏まえて、平成３（1991）年 12 月 27 日の閣議決定で、ロシア連邦をもって、解体消滅した「ソ連邦」を承継した国家として「政府承認」して、これを関係国に通告した。

「政府承認」は、新しく誕生した国そのものを国際社会の正式なメンバーと認める「国家承認」とは根本的に異なる。

「政府承認」は、国家の存在自体は認めた上で、クーデターや革命などで非合法に政権交代が起こされた際に、その新しい統治機構をその国の「正式な代表政府」として承認することである。

平成３（1991）年 12 月 26 日までのソヴィエト社会主義共和国連邦の駐日大使（ルドヴィグ・チジョフ）は、同年 12 月 27 日の宮澤内閣の閣議決定の瞬間から、引き続き駐日ロシア連邦大使として執務することになったものである。

この宮澤内閣の対応は、大正６（1917）年 11 月の帝政ロシアが消滅した際の日本政府が取った対応と同じである。帝政ロシアからソ連邦への謂わば国家の相続と言うべき手法と同じやり方であると目される。

連邦解体後には、（ソ連邦）＝（ロシア連邦）となるから、旧ソ連邦の国名をロシア連邦に変更しただけのもの、即ち、単なる名称変更、国名変更と観念出来る。

相続登記の際の、謂わば除戸籍謄本に相当する、日本国政府（宮澤内閣）の閣議決定という有力、且つ、確実な裏付けがある。寧ろ紛争当事国の不完全不十分な条約締結や、批准など不要であるといいたいところである。

７　国際法上、国家存立の３要素として、①国土、②国民、③統治機構が掲げられる。

①は国境問題として、②は国籍法など国民の資格要件や民族移動について問題とされるが、③については、夫々の国により政治体制の好みの問題や歴史的経緯や伝統のこともある。その国が、他国とどの様な交合をするか、例えばNATOに加入するか否かなど国の基本方針決定、選択もこれに含まれる。統治機構のトップにつく人間の資質能力を無視することが出来ない。

しかし、それにつけても日本の内閣や外務省は、他国の内輪揉めに対しては、極めて慎重で有り、出来る限り発言を控え干渉したがらないが、私などは些か歯がゆいと思うこともある。

８　ウクライナのこの様な対応の結果、日本国内における以下の様な困った事態が生じている。

(1) 長崎市のグラバー邸の南西側に近接する帝政ロシア所有名義の土地が在った。明治３７（1904）年、日露戦争の頃、帝政ロシアの領事館が開設されていた当時の敷地であった土地である。

対岸の稲佐山の悟真寺(浄土宗)境内のロシア人墓地には、約 270 基の墓標があり、ロシア兵はじめ数百体のロシア人が埋葬されている。郷土史家としても名高い先代住職木津義彰氏が長年に亘って無償で供養して来た。

平成３(1991)年にゴルバチョフ元ソ連大統領が来日の折、同人をロシア人墓地に案内した木津章史氏は、義彰氏のご子息である。

日露戦争当時は、日本海海戦の事後処理など帝政ロシアの領事館が置かれ、外交官が実際に領事事務を執っていた。

(2) その後、帝政ロシアは、大正６（1917）年、共産革命により消滅、ソ連邦（ソヴィエト社会主義共和国連邦）がこの領事館敷地の承継人となった。しかし、ソ連邦は、この土地で領事事務を行った形跡はない。

昭和２０（1945）年終戦の年には、お化屋敷と言われて放置されていた。その後は、複数の不法占有者が入り込み、住宅を建てて勝手に建物の保存登記をして暮らしていた。

昭和１７（1942）年の長崎市の土地台帳には、以下の記載があった。

字　　南山手町
地　番　　イ１９
地　目　　宅地

地　積　　４７３坪
所有者　　露国領事館
沿　革　　昭和１７年地番改訂
昭和１７年４月１日勅命第７６号に依り所有権取得につき有租地成
昭和１７年１２月２８日　賃貸価額決定
昭和１８年８月３１日　領事館敷地

(3) 筆者は、昭和６２（1987）年10月19日、ソ連邦（駐日大使ニコライ・ソロヴィヨフ）の依頼により、この土地を土地台帳の記載に基づきソヴィエト社会主義共和国連邦名義で保存登記をなした。その結果、現在の登記簿上の記載は、以下の記載となっている。

表題部
所　在　　長崎市南山手町
地　番　　イ壱九番
地　目　　~~領事館敷地~~
地　積　　~~四七参．〇〇歩~~　　１５６３㎡
所有者　　露国領事館

甲区欄
一番　　所有権保存
昭和六弐年壱〇月壱九日受付　第参弐壱壱六号
所有者　　ソヴィエト社会主義共和国連邦

乙区欄
（記載なし）

ソ連邦の解体とロシア連邦の承継については、前記２、３に前述した通りの経緯である。

(4) その後、筆者はロシア連邦（駐日大使アレクサンドル・パノフ）の原告訴訟代理人として平成２（2000）年、長崎地裁に不法占拠者全員を被告として、建物収去土地明渡の本訴を提起し、勝訴判決を得て、この判決は確定した。

本訴提起に当たり、同土地の登記簿上の所有名義人を前述の経緯に基づき、ソ連邦を承継したロシア連邦に所有名義を変更するべく、長崎地方法務局宛、登記申請をしたことがあったが、登記官からの勧告を受け入れ取下をした経緯がある。主な理由は、ウクライナが法務省宛条約未批准による条約未発効の口上書を提出し、ロシア連邦名義に変更することに反対していたことによる。

(5) その結果、長崎の土地のみならず日本国内に在る現在も尚ソ連邦名義のままになっている不動産については、ロシアの登記申請の都度全てウクライナの反対によって、ロシア連邦名義に変更することが出来ない現状にある。

東京都港区麻布台にある駐日ロシア連邦大使館の土地、建物は、現在でも、全てソ連邦名義で放置されたままである。

関東直下型地震の心配される現在、ウクライナの反対で建物を耐震構造に手直しすることも実行できないのが現状である。

９　東京都文京区本駒込２丁目に昭和５３（1978）年２月１日贈与によってソ連邦が所有者となった土地が在る。

表題部
所　　在　　文京区本駒込二丁目
地　　番　　２４２番４
地　　目　　宅地
地　　積　　５３０．９０㎡

権利部（甲区）
順位番号　　１
登記の目的　所有権移転
受付年月日・受付番号
昭和５４年７月１２日　第１３３１５号
権利者その他の事情
原　因　　昭和５３年２月１日贈与
所有者　　ソヴィエト社会主義共和国連邦
順位２番の登記を移記
順位番号　　付記１号
登記の目的　１番登記名義人名称変更
受付年月日・受付番号
令和２年２月１２日　第５３１８号
権利者その他の事情
原　因　　平成３年１２月２７日国名変更
所有者　　ロシア連邦
順位２番の登記を移記
登記の目的　余白
受付年月日・受付番号
余白
権利者その他の事情
昭和６３年法務省令第３７号附則第２条第２項の規定により移記
平成１４年６月２０日

登記簿記載の、「平成３年１２月２７日国名変更」の平成３年１２月２７日は、宮澤喜一内閣がロシア連邦をもってソヴィエト社会主義共和国連邦の承継国として政府承認した日である。

長崎の土地についても理屈は同じ筈である。

ウクライナの意向に関係なく、すべてソ連邦、即ち、（ソヴィエト社会主義共和国連邦）＝（ロシア連邦）となるべきものである。法務局は内閣の閣議決定を尊重すべきである。

10　ロシア連邦所有の長崎の土地については、長崎市はこれまでに固定資産税を賦課徴収した事実がない。根拠は、所得税法第３４８条（固定資産税の非課税の範囲）９項により、大使館等には免税となっているからである。しかし、本件土地は、地目は宅地であり、大正、昭和、平成、令和と長い期間領事館としての使用がなされた事実はない。

明らかに荒地であり、領事館敷地などではない。しかも長

崎の土地は、地目が宅地である。

東京都文京区の土地は同じく宅地であるが、固定資産税が課せられている。この不均衡は、早急に正されるべきものと思う。

即ち、所得税法第３４８条９項は、但書をつけて「現に大使館等に使用している場合に限る」と改正すべきである。そうでないと地方自治体に対して固定資産税相当分の損害を与え続けることになる。

これは明らかに地方税徴収の怠慢である。グラバー邸近隣の不動産の時価評価は極めて高額であり、その累計は莫大な額となる筈である。その損害発生の継続は早急に是正されるべきである。（Ｒ８／８／４　記）

参考資料

1「ニコライ堂戦後史」堀合辰夫 ドラマチックロシア in JAPAN 生活ジャーナル社
2「帝政ロシア 長崎領事館」堀合辰夫 同上
3 原告ロシア連邦 被告安宇井時子外 長崎地方裁判所 平成12年(ワ)第474号建物収去土地明渡請求事件判決
4 特集「長崎・ロシアの『領土』」堀合辰夫 日本対外文化協会 2020.3.20 ニュースレター

◇◆編集後記◆◇

▼本号は久しぶりの「旅行・留学特集」です。中小企業支援団体ティグレのモンゴル視察、大阪日ロ協会のペテルブルク視察、ヒッポファミリークラブのキルギス・ホームステイ交流、バルト三国手仕事の旅、いずれも JIC 旅行センターが協力し手配させていただきました。JIC も久しぶりに元気が出てきています。▼エストニア・タリン大学にロシア語留学した 2 人の学生へのインタビュー記事は、ロシア以外の国でのロシア語留学の実情を知る上で、とても参考になります。ロシア語留学は JIC の当初からの中心活動の一つです。JIC はロシアへの留学も、ロシア以外の国への留学も、どちらも全力で取り組みます。▼今年は 1956 年 10 月の日ソ国交回復から 70 周年にあたります。この 70 年間、日ソ・日露関係は、厳しい政治対立と経済協力・相互交流の間で揺れ動いてきました。経団連国際経済本部・樫村氏の講演録は、日ロ経済交流の歴史と現状を分かりやすく解説しています。▼徳山あすかさんが連載コラムで紹介している HINODE JAPAN（モスクワ・日本文化フェスティバル）の記事にも励まされます。ウクライナ戦争が続いている間は困難な状況が続きますが、それでもロシアとの文化交流、人的交流を絶やさず、将来の関係改善に向けた「芽」を残していきたいと思います。（F）

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

37年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 37 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン相談 受付中！

期間：2027年4月1日より10ヶ月

締切: 2026年12月10日

モスクワ国立大学 1,590,000 円（授業料 10 ヶ月） 予価
サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,155,000 円(授業料 10 ヶ月) 予価
ゲルツェン教育大学 998,000 円（授業料 10 ヶ月） 予価
ウラジオストク極東連邦大学 420,000 円(授業料 10 ヶ月) 予価
ペラルーシ国立外国語大学 422,000 円(授業料 10 ケ月) 予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！（中央アジア、バルト諸国など）

◆JIC ロシア留学デスク◆
電話またはメールでご連絡ください。
東京事務所　平日 9:30-16:30　03-3355-7294
※留学相談はオンラインで行っております（要 事前予約）

